
OAIT

2021

Preface

卒業設計作品集 第46号

本田 昌昭（建築学科長）

本学建築学科の卒業研究は、卒業設計と卒業論文のいずれかを選択することになっており、毎年その成果を卒業設計作品集や学科ホームページでとりまとめて公表しております。

この卒業設計作品集には、2021年度の卒業設計のうち、入選作品11点を収録しております。Jury Reportをお読みいただければ、審査過程に加え、本学科の設計指導方針もご理解いただけるのではないかと考えます。

ご高覧賜ります各位に、忌憚のないご意見とご指導をよろしくお願い申し上げます。

Contents

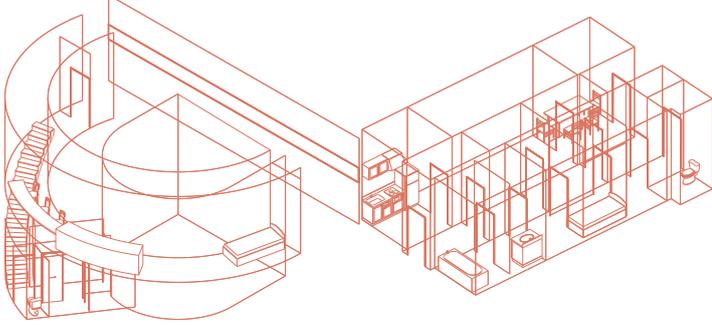
Finalist Projects

最優秀賞	交換する住まい	西村 翔太	01
優秀賞	相利共生	屋 卓治	05
優秀賞	母の家、父の家、わたしの家	小林 美穂	09
佳作賞・大宮賞	土を練り、火を焚く	亀山 拓海	13
佳作賞	不浄払拭する丘	藤重 毅士	17
佳作賞	防潮堤の建築的再考	澤井 祐介	21
佳作賞	物語茶室 ～日本昔ばなしと茶道具～	徳永 紗	25
佳作賞	私の欠片、街の断片	足立 優太	29
佳作賞	Society5.0 における人の距離 ～夢洲：スマートシティ実験場を跡地にしない～	半野 拓実	33
佳作賞	Jvu jade ～当たり前ではなく感謝を 日常に気付きを～	川田 陸	37
大宮賞	舟運から広がる水都大阪の可能性	櫻本 聖成	41

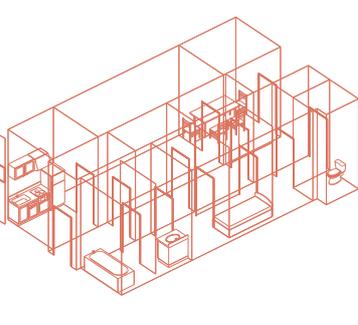
Jury Report

45

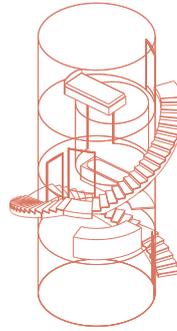
Finalist Projects



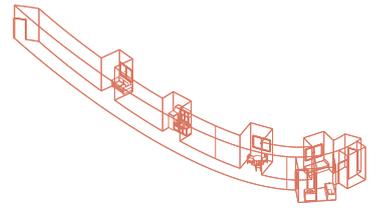
承認欲求はあるが謙遜する織細さん



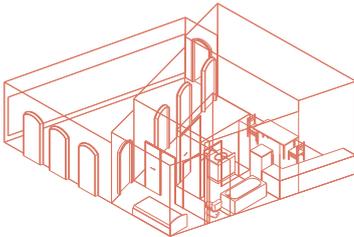
落ち着いているように見えるが心の中では一喜一憂する織細さん



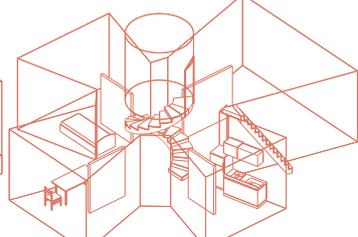
眠りたいけど興奮して眠れない織細さん



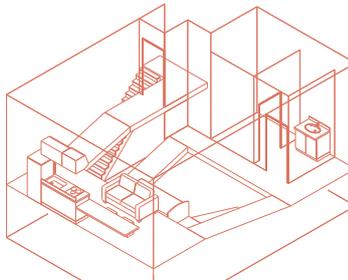
アイデアマンだけどあと一歩のところまでやめちゃう織細さん



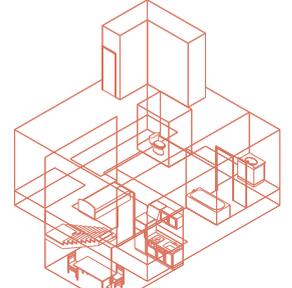
八面玲瓏だが八方美人な織細さん



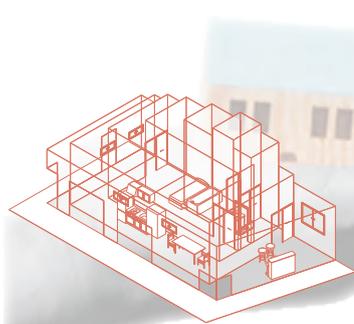
情報が欲しいけどそれが視覚的に多いと疲れる織細さん



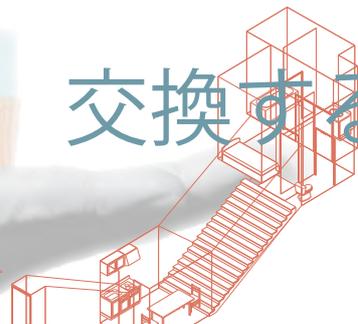
行動しないといけないことはわかっているがリスクが見えて行動できない織細さん



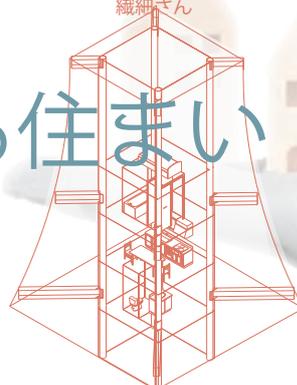
世話好きだけど断りたい織細さん



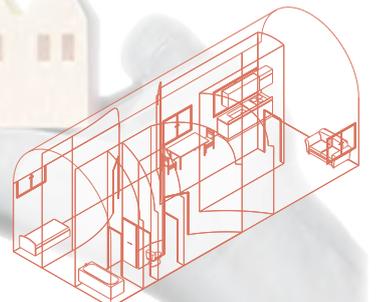
外は好きだが大きな音や光に敏感な織細さん



人がしてないことをしたがるが目立ちたくはない織細さん

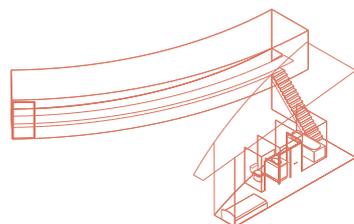


1人が好きだけど独りは嫌な織細さん

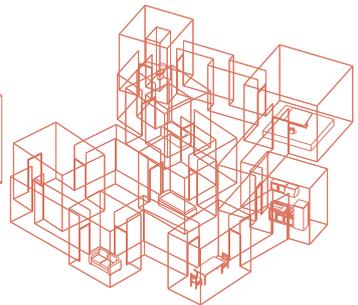


すぐに仲良くなるが少しすると距離を置きたくなる織細さん

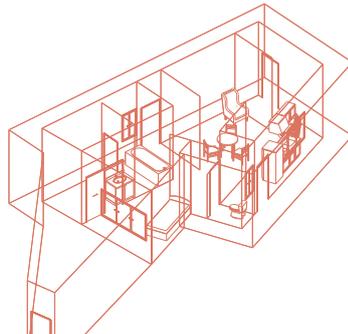
交換する住まい



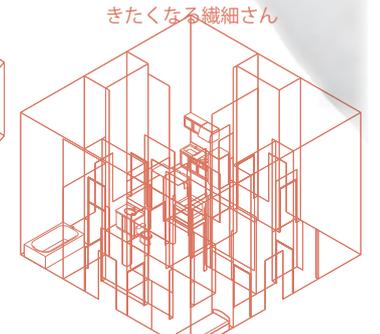
人と長時間一緒にいると疲れるけど一緒に居たい織細さん



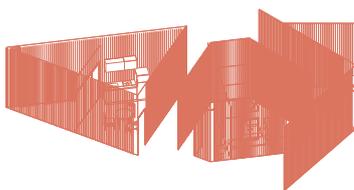
新しいものが好きだがすぐに飽きる織細さん



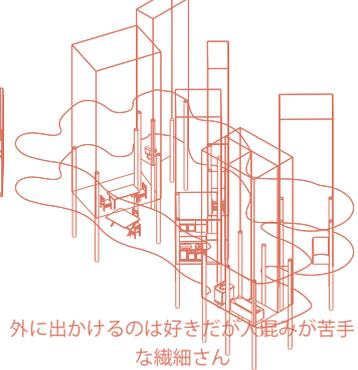
共感しているが本当は反感している織細さん



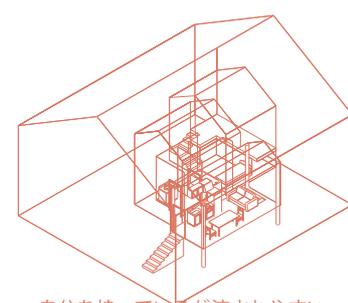
奔放で居たいが我慢してしまう織細さん



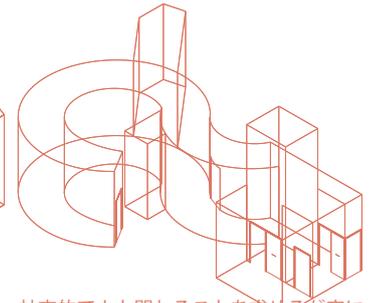
集中していても違うものを受信してしまう織細さん



外に出かけるのは好きだが入混みが苦手な織細さん



自分を持っているが流されやすい織細さん



社会的で人と関わることを求めるが家に帰って一人反省会をする織細さん

00. ビジョン - これからの「集まる暮らし」 -

これからの「集まる暮らし」は住み開きやみんなで場所を共有するものではなく、自分自身で場所や人、時間を選択しながら住まいを交換して集まる身軽な暮らしである。

01. 背景 - 排他性を帯びた多様性 -

- 多様性と同質性 -

戦後の住宅不足を補うために大量供給されたプレハブ住宅。それに伴いセキュリティ対策が増加し、プライバシーを重要視する動きは地域社会、地域住民を完全に断絶するものへと変容させていった。さらに住宅に対するニーズ、多様化するライフスタイルや家族形態といった生活に対する価値観の変化に対応するために、社会全体が多様性を求めた。その中の一つである現代の暮らしは「住み開き」や「シェア空間」という「多様性」を目的とした共存が前提の暮らしで成り立っている。

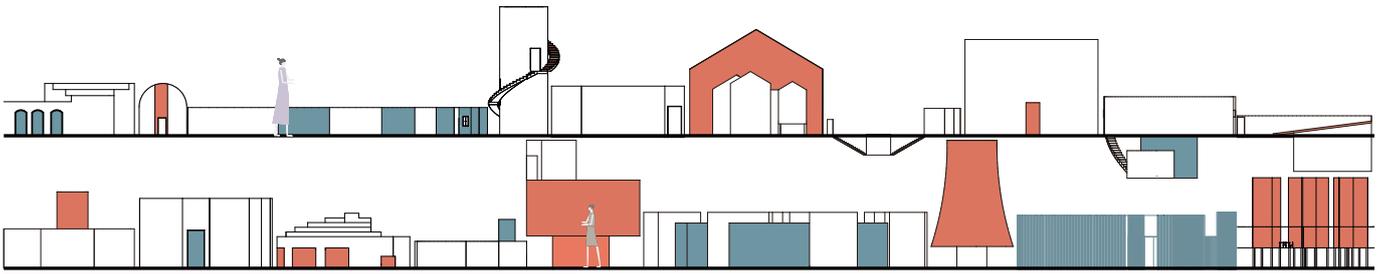


02. 問題提起 - 共存からはみ出る生活 -

5人に1人の割合で存在するとされている繊細さんは、その特徴から人の気持ちを必要以上に汲み取り誰にでも共感してしまうこと、人からの評価に敏感に反応してしまうこと、自分の考えていることを我慢して相手の考え方を尊重するという生活のあらゆる場面で他の4人側に合わせてしまうことで生きずらさを感じている。これらの「本当の自分を抑えながら過ごす」といった問題は過剰なほど多様性を追求してしまった「共存」を前提にした暮らしがもたらした綻びである。

03. コンセプト - 引っ越しによる自分探し -

「繊細さん」といわれる住人が日常生活の中で引っ越しによって自分に合う暮らしを探しながら集まって暮らすという賃貸住宅の提案。



04. プログラム - マッチングアプリ的つながり -

Phase1 発信

繊細さんにとって大事なアウトプットを行う。アプリケーションを導入し、自宅での生活を SNS 上に発信することでオンライン上のコミュニティと実空間を介した新たなコミュニティが生まれる。

Phase2 内覧的体验

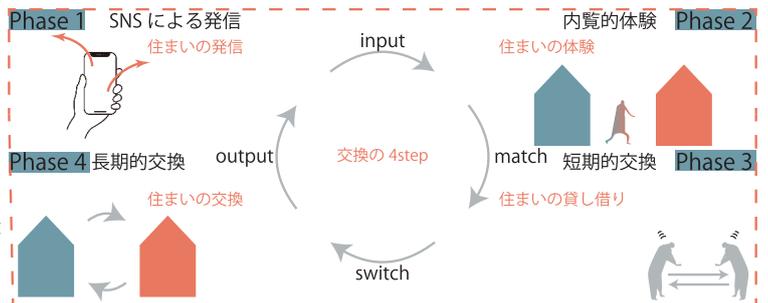
日常から通る廊下は各住宅の生活（性格）がはみ出たものとなっており、視覚的ではなく体験的に住人とつながることでどんな住宅なのかを知ることができる。

Phase3 短期的交換（貸し借り）

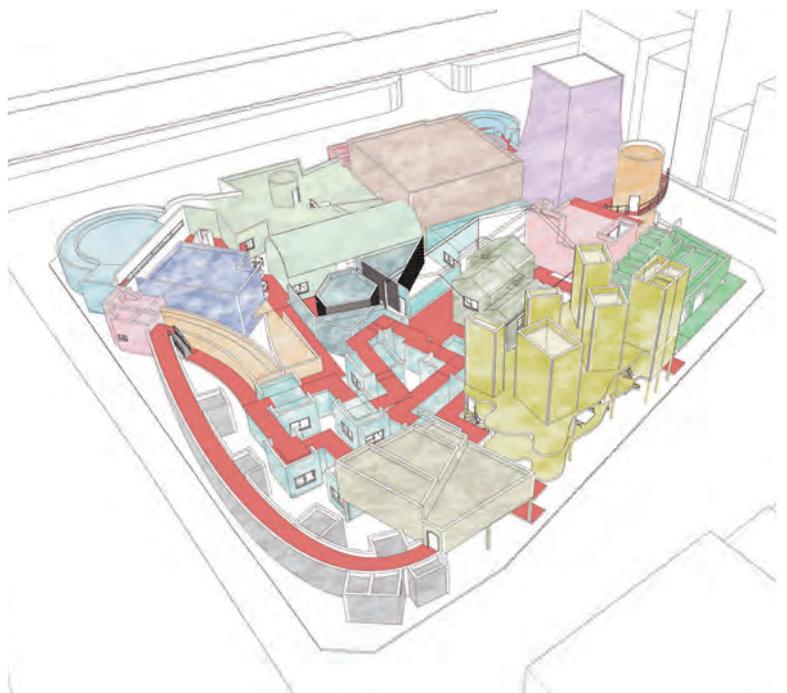
phase1 と phase2 から得た情報から短時間だけ使ってみたいスタジオなどがあれば住人に SNS 上で申請を行う。相手もこちらの住まいに興味を抱き、マッチングすれば短期的交換（貸し借り）は成立する。

Phase4 長期的交換（引っ越し）

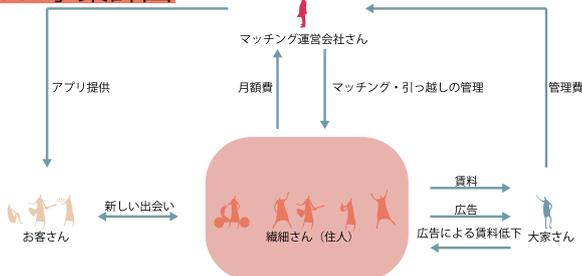
短期的な交換（貸し借り）（もしくは、phase3 を省略）が完了し、お互いが住まいを入れ替えたい場合、長期的交換（引っ越し）が成立する。



05. 敷地 - 今宮戎神社 -



06. 事業計画



承認欲求はあるが謙遜する織細さんのための住まい

落ち着いているように見えるが心の中では一喜一憂する織細さんのための住まい

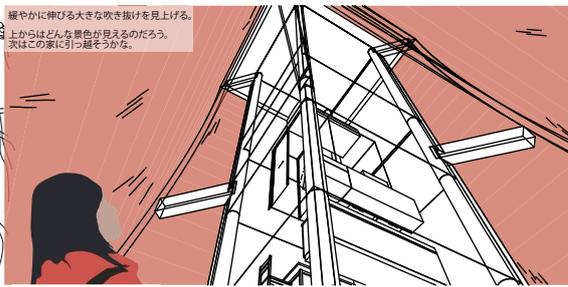
眠りたいけど興奮して眠れない



情報が欲しいけどそれが視覚的に多いと疲れる織細さんのための住まい

1人が好きだけど独りは嫌な織細さんのための住まい

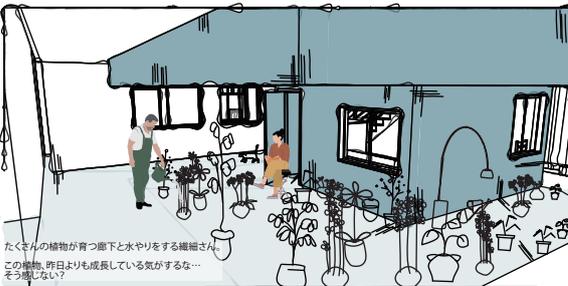
共感しているが本当は反感して



行動しないとイケないことはわかっているがリスクが見えて行動できない織細さんのための住まい

世話好きだけど断りたい織細さんのための住まい

外は好きだが大きな音や光に毎



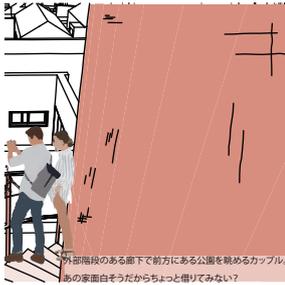
奔放で居たいが我慢してしまう織細さんのための住まい

集中していても違うものを受信してしまう織細さんのための住まい

外に出かけるのは好き織細さんのた



まい織細さんのための住まい



アイデアマンだけだとあと一歩のところでやめてしまう織細さんのための住まい

八面玲瓏だが八方美人な織細さんのための住まい

いる織細さんのための住まい

人と長時間一緒にいると疲れるけど一緒に居たい織細さんのための住まい

新しいものが好きだがすぐに飽きる織細さんのための住まい



敏感な織細さんのための住まい

人がしてないことをしたがるが目立ちたくはない織細さんのための住まい

すぐに仲良くなるが少しすると距離を置きたくなる織細さんのための住まい

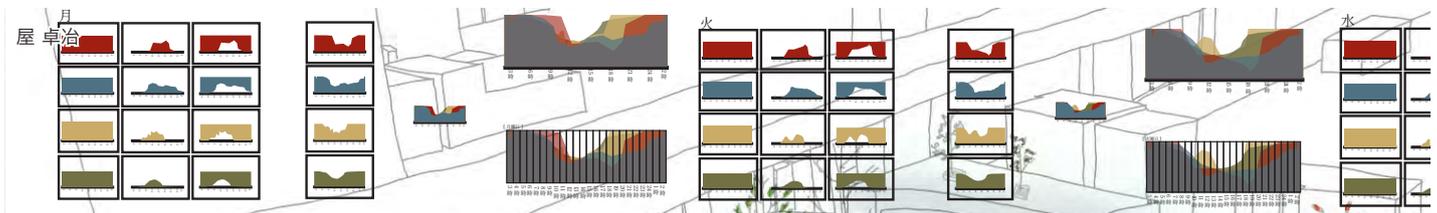


きだが人混みが苦手な織細さんのための住まい

自分を持っているが流されやすい織細さんのための住まい

社交的で人と関わることを求めるが家に帰って一人反省会をする織細さんのための住まい

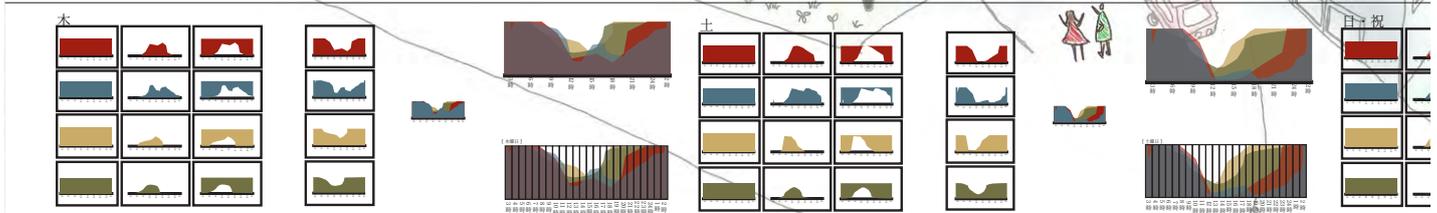




相利共生

1つの集合住宅
5つの町

生物学の相利共生を
町と町の関係に置き換える。



00 背景 関係性を持たない町と人



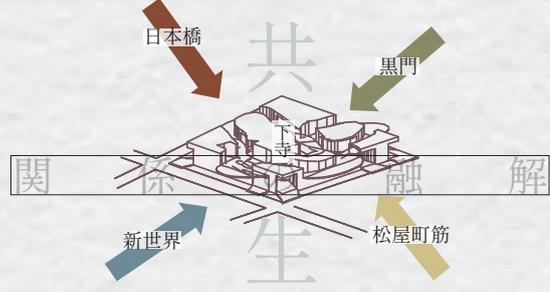
下寺、日本橋、新世界、松屋町筋、黒門。
異なる特色を持つ5つの町が隣接しているエリアが大阪の浪速区にある。
5つの町はそれぞれが町単独での利益を求めて活動をして町同士の関係は希薄で関わり合うことなく分断されている状況にある。

01 問題 競争に負ける4つの町、



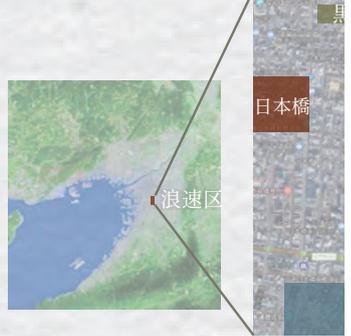
周辺の4つの町「日本橋、新世界、松屋町筋、黒門」客を奪われ衰退が進んでいる。
下寺は外部の多くの人を巻き込んでいた軍艦いのが消え去り、町から活気が無くなってこの状態が続くと特色の薄れた無色の5つの

03 相利共生の拠点 → 集合住宅

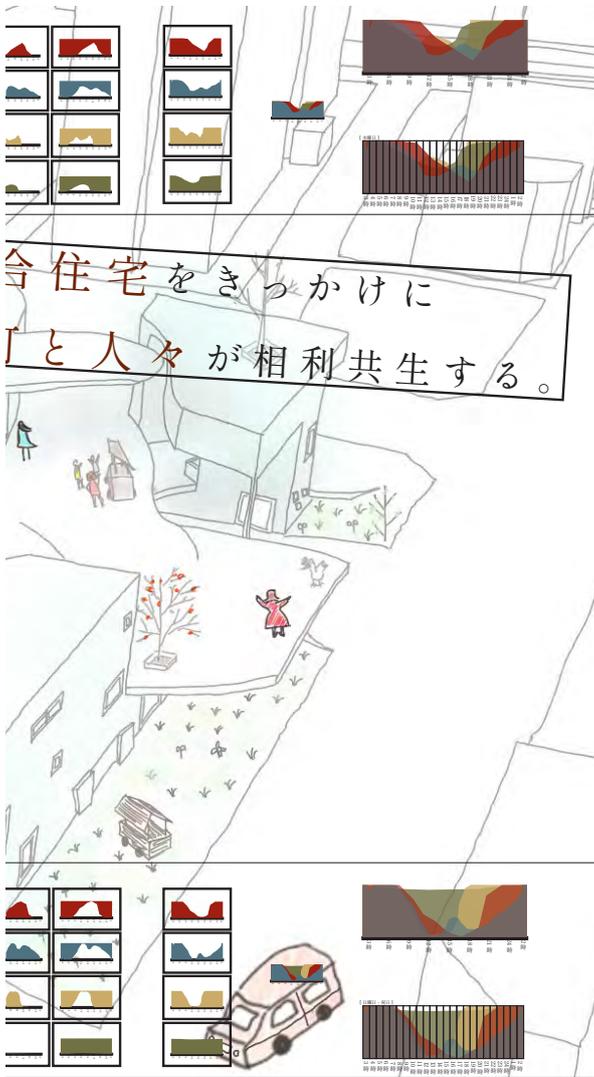


5つの町はかつてのように下寺で共生することで本来の力を取り戻す。
下寺に5つの町に分断された関係を融解する仕組みを持つ、相利共生の拠点となる集合住宅を設計する。

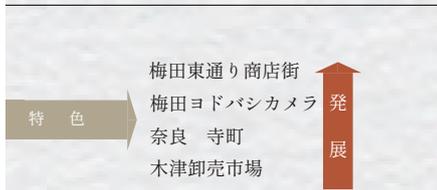
04 計画敷地 5つの町



計画敷地は5つのエリア（下寺、日本橋、新世界、松屋町筋、黒門）の旧日東小学校跡地（約7.2



混じり合いが消えた1つの町



が、黒門」は同じような特色を持った町に顧

給アパートが解体されたことにより混じり合

い町になってしまうのではないか。

の中心「下寺」



(新世界、松屋町筋、黒門)の中心部である大

02
コン
セ
プ
ト

相利共生 ~ 生物学の仕組みを町の仕組みに~



生物学に相利共生という仕組みがある。

異なる生物種が協力し、互いの短所を補い合う関

係のことをいう。
これを町同士の関係に置き換えると異なる町同

士が協力し互いの短所を補い合う関係となる。
競争に負ける4つの町、混じり合いが消え去った

05
デ
ー
タ

町で余った密度を建築のきっかけに

空いた時間を有効活用し、それぞれの町から下寺の集合住宅に集まってもらい、

副業の時間を共有することで5つの町が相利共生する。

空いた時間を可視化するために密度のグラフを使う。
日本橋、新世界、松屋町筋、黒門の各曜日ごと24時間の密度変化を調査し作成

した実際の人口密度を基に引き算で余りの人口密度を可視化する。
この余りの密度を反転させることで利用可能な密度となり、これを4つ合成すると

a) 媒介車 + 貸し棲み処 b) 形態化のプロセス
 c) 相利共生する公私 d) 変化する領域 e) 相利共生する町と人

a) 貸し棲み処



=

住人

生物の相利共生ではクマノミがイソギンチャクに棲み処を貸し出す。
 町と人の相利共生では住人がスタジオやループを商人や職人、訪問客に貸す。

a) 媒介車



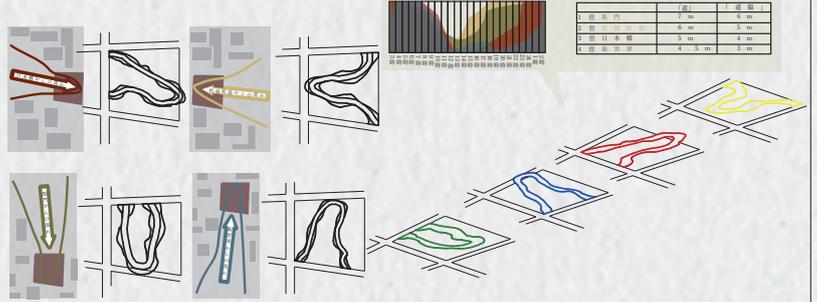
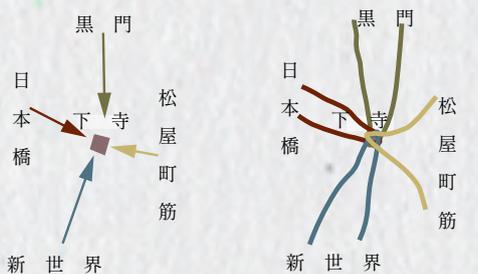
【生物的相利共生】
↓
媒介者



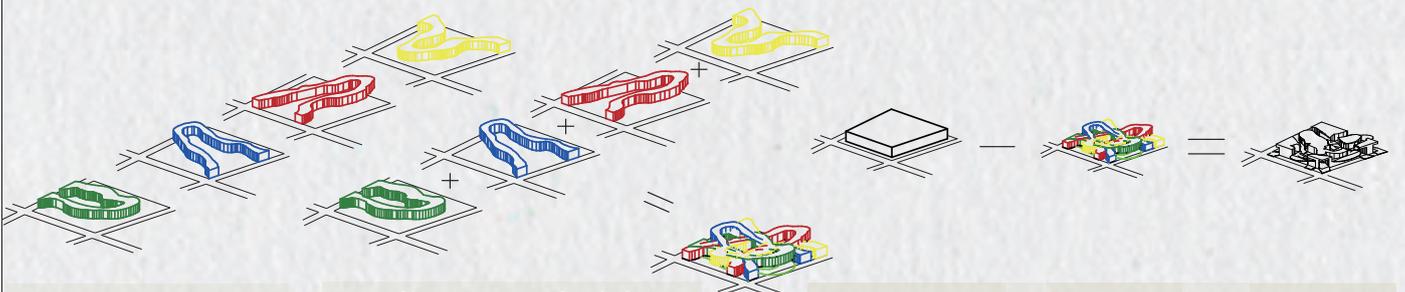
【町と人の相利共生】
↓
媒介車

生物の相利共生ではミツバチが媒介者となり花粉を運び、動けない花同士を混じり合わせている。
 町と人の相利共生では屋台が媒介車となり動けない町同士を混じり合わせる。

b) 形態化のプロセス



行き帰りの流れへと変換
 1 下寺への流れ 2 ループと定義 3 4つのループ 4 利用可能合成密度を基に順位付けをし「道」「道脇」の幅を決定。

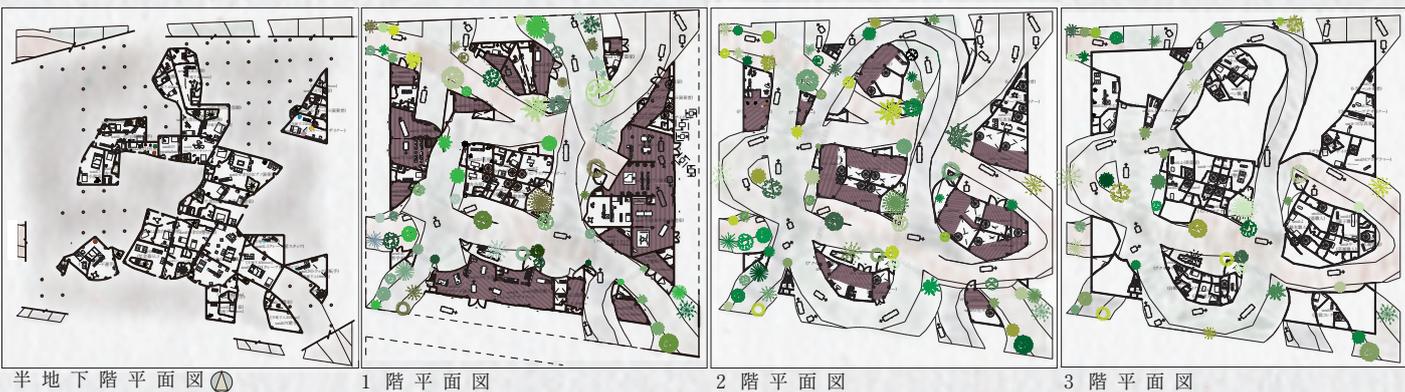


5 ループに厚みを持たせる。 6 厚みを持たせたループを合成する。 7 住戸ヴォリューム 合成ループ 建築形態

c) 相利共生する公私

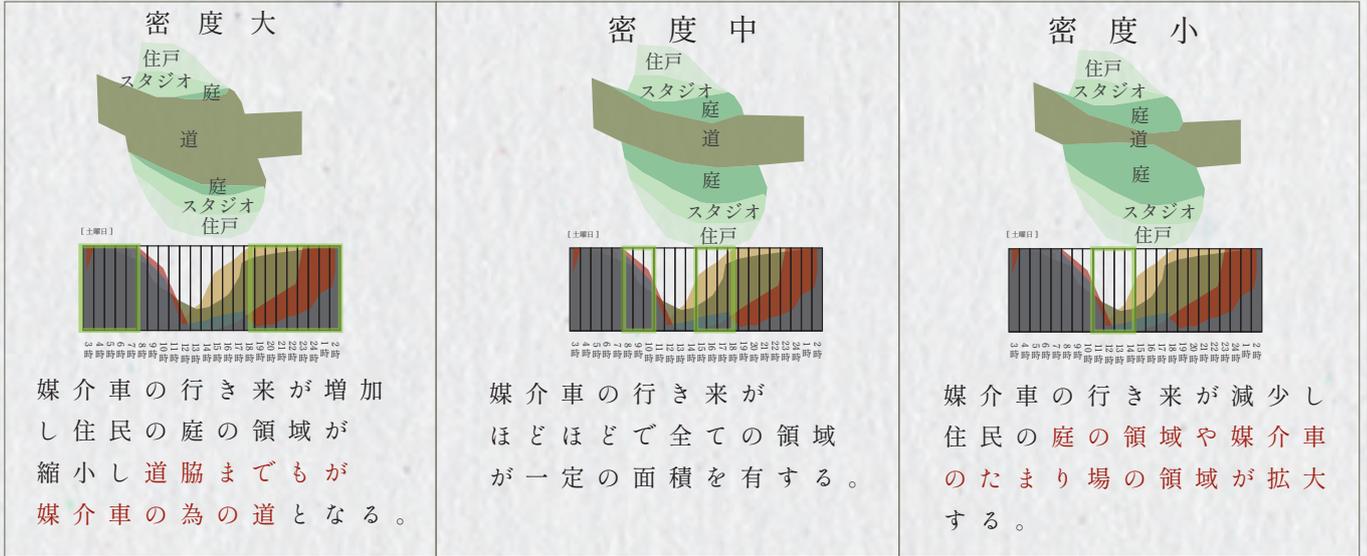


典型的な集合住宅の平面構成。 2段階で構成されていて強い境界線がある。 スタジオと庭が境界を繋媒介車が介入し公私の4段階の構成になる。関係が曖昧になる。

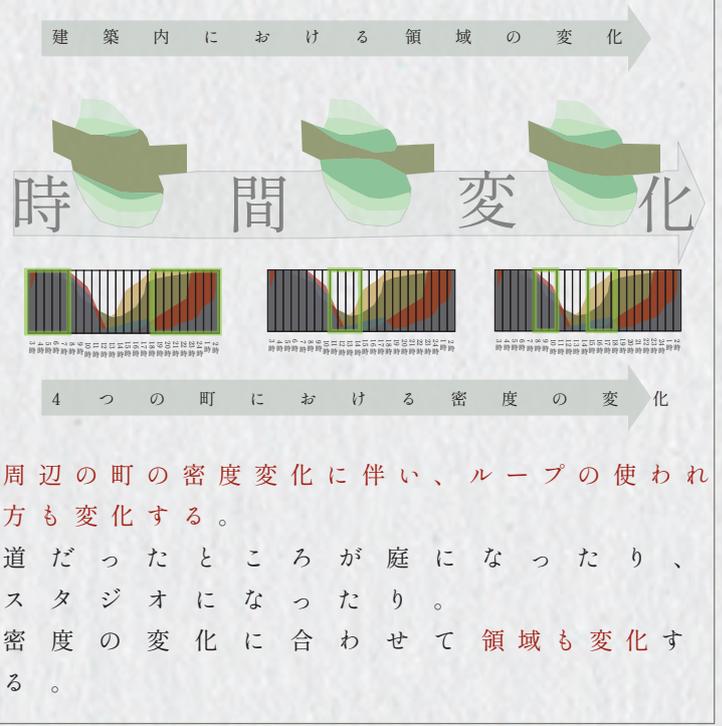
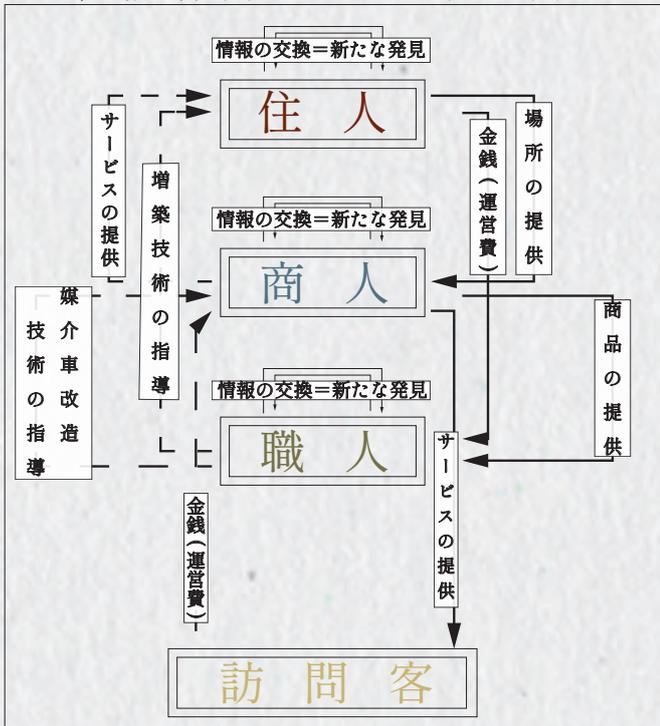


半地下階平面図 1階平面図 2階平面図 3階平面図

d) 変化する領域



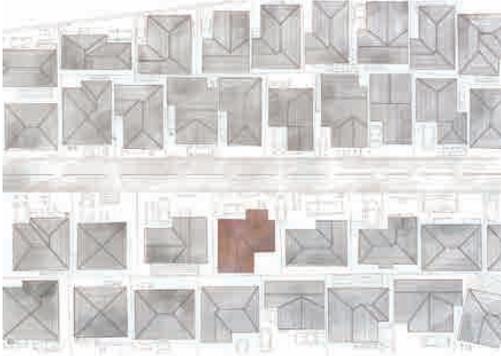
e) 相利共生する町と人



07 各種図面



母の家、父の家、わたしの家。



大規模郊外住宅地の縮小ともいえる、わたしの街の更新を通じて、家と家族、そして家族と地域、さらには建築家の職能の在り方について問う。

家と家族

戦後に住宅供給のために大量に作られたnLDK型の住居は、核家族という1つの人間関係の在り方を決定づけた。

家族が一つの単位として当たり前認識される中、**実際はそれぞれの個人が社会と異なる関係で繋がっている。**

それぞれに固有の生活リズムがあり、家を出る時間も違えば、帰る時間も違う。家の中の過ごし方もそれぞれだ。

家族の暮らす家は、家族という1つの集団のための場所でありながら、複数の独立した個人のための場所であるべきではないが、

さらに、父、母、子で住むという家族という1つの単位に対応した家である必要もないのではないが。



両親がハウスメーカーによる家を建てた。そこには私の家がなかったのであるように、小さな子どもがいる家族によって、同じような家が同時に数多く建てられた。**Ⅱ 家を作る (2002)**



私が小さい頃から父は出張などで家に居ないことが多く、そして私が成長してからは母が私を育てた。家では私と母と姉の3人の生活が始まった。**Ⅲ 家を持つ (2008)**



母が一人暮らしを始める。家の中でわたしと母の2人が住む。家ではわたしと2人で住むものになっていく。**Ⅳ 母の家 (2021)**



『母』という役割から開放された私の母。1人の女性の人生が新たに始まる。**Ⅴ 母の家 (2022)**



父が退職して家に帰ってくる。『母の家』では父の居場所が数個のものとなった。父はまちに自分の居場所を求め、『母の家』として完成された『家』を持つ。父はまちと接続された生活を送る。**Ⅵ 父の家 (2020)**



母がわたしと母の2人で暮らすことと働くことが増える。わたしは、わたしの家で働き、わたしのまちで暮らす。**Ⅶ わたしの家 (2023)**

「家」の終焉：家と家族の寿命

家を作るのは子どもが小さい頃が多い。それから20年、30年経つと子供は大人になり、老いた夫婦と空いた部屋だけが残る。さらに50年も経てば、家を手放し、夢のマイホームは空き家となる。
住宅の機能的な面ではない要因で迎える**家の寿命**というのは、**現代の家族の在り方**と深く関わっている。
この提案では、改めて家族、そして家という枠組を捉えなおす。

大きな「家」としてのまち：行為と空間の「内/外」反転

現代の住宅では、住宅の中での快適性を高め続けた結果、**家が外部との関係を遮断するための装置**となってしまっている。
このことは、**家族の孤立性を高め、地域との関係の分断**をもたらしている。
この提案では住宅の機能や、行為など、**内部で行われていたことを外へと、つまりは地域へと持ち出す。**
地域という「外」は「内」となり、その結果、**地域は大きな「家」となる。**

03 母の家

この20年間、母はこの家で「母」という役割を全うしてきた。
家族の家として存在してきたこの家が、これからは母という役割を終えた1人の女性の家となる。
母が家の一部で小さく始めたことが、家の庭へと広がり、さらにはまち全体へと広がっていく。

小さな温室と家の補修

最近母は、ホームセンターでたまたま見かけた小さい温室で植物を育てることに興味を持ち、家のあらゆるところで育てている。いままでの家の中で母の生活は、お気に入りの場所が決まっていたけれど、その場所以外で過ごすことが少なかったけれど、**植物を育て始めて、母の家での行動範囲が広がった。**

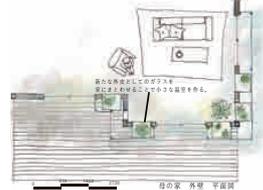
■緑のつぎはぎ
母の趣味によって、1軒の家に緑が広がり、さらにまちにも広がってゆく。

■壁のメンテナンス
既存の壁のすこし外側に新たにガラス面などを取り付けることで外壁を保護する。
外壁との間の空間に空気層が生まれ、断熱効果も生まれ、それは「小さな温室」として機能する。



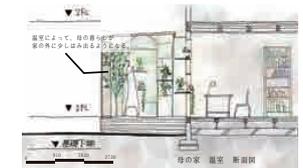
建てられてから20年以上の時間を経た家は、メンテナンスの時期を迎えている。家の補修をするともに、母のための新たな空間を生み出していく。

「近所で解体された空き家からもらってきた窓枠などを用いて温室を作ってみた。ここにしかない温室ができた。」



家の内外をあいまいにする「温室」

さらに植物を育てることに夢中になった母は、庭にも場所を広げていく。「小さな温室」だけでなく、昔使っていた嫁入り道具であるタンスや思い入れのある家具、近くの家のリノベーションなどで出てきた廃材なども利用し、庭へと温室は拡張されていく。



温室が家の顔となることで、母は近所では植物好きとして認識されるようになった。近所のガーデニングが趣味のおばさんと、庭の一部でもある温室で軽くお茶をしたり、たまには植物をプレゼントしたり、ついには園芸好きのご近所さんとワークショップを開くことに。

■家族的関係の変化

かつて、家族の家であったこの家は長い時間を経て、いつしか母の家となる。ここでは母は独立した一人だけの家族である。



「いらなくなったバスタブや家の中の不用品を、プランターとして再利用してみた。意外と庭に馴染んできた。」

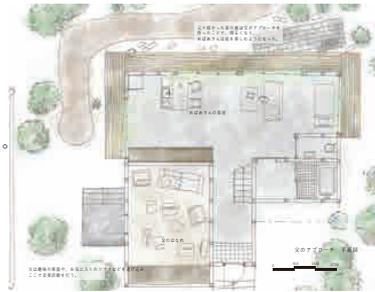
内から外へと拡張された「植物」空間のネットワークは、母をまちと接続するきっかけとなった。

04 父の家

父は退職し、家に戻ってくる。
長い間一人暮らしをしていた父は、家族との生活を大切にしながらも、一人の時間を大切に過ごす「一人生活」の習慣は変わらない。

趣味である音楽を楽しむ場を起点として、父はまちとのつながりを紡いでいく。

「空き家の解体から出た、廃材を道に敷き詰めてみた。場所によって柄が違うのが面白くて、いい。」



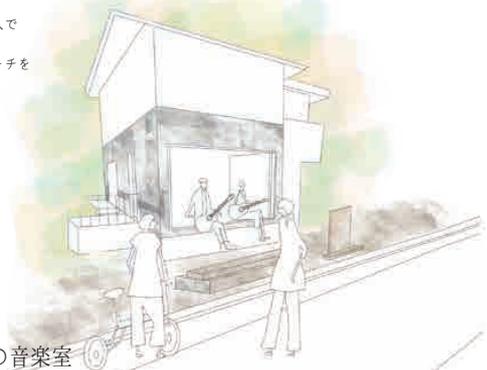
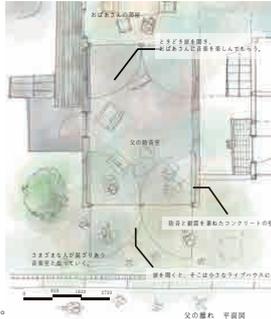
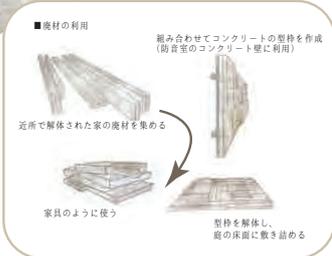
父は時々、扉を開いてライブを開く。庭にはご近所の音楽好きが集まり、小さなスタジオに、そしてライブハウスへと変化する。

やがて父は同じ趣味を持つ近隣の住民を「離れ」に招くようになる。

父の楽しみのための個人の空間としての「離れ」は、同じ趣味を介して、人の新たな関係を連鎖的に紡ぎ出していく。

父のもう一つの家

趣味であるギターや音楽に熱中するため、スタジオとして近所に一人で暮らすおばあさんの家の空き部屋を借りて「スタジオ」とする父。その家の既存の玄関とは別に、父の「部屋 / 家」へと至る、アプローチを作ることで、大家のおばあさんの生活にも変化が生じる。



まちの音楽室

父の「離れ」を防音室へと部屋を改修する。そしてこのコンクリートのボックスには4枚の扉が取り付けられた。この扉を開けば、庭とつながったり、おばあさんの部屋とも空間を一体化できる。父とまち、おばあさんとの新たな関係と生活。

父とその仲間たちは、時に扉を開いて、まちに音楽を響かせる。

庭や道路には、ご近所の音楽好きが集まり、そこは小さな「ライブハウス」となる。

「離れ」は、父と近隣の人々との新たなつながりを通じて、父の「もう一つの家」となっていく。

05 わたしの家

建築家として独立したわたしはこのまちで設計事務所を開くことにした。
建築をつくるのが「産業」となってしまった今、作る側と使う側に大きな壁があるとわたしは感じている。

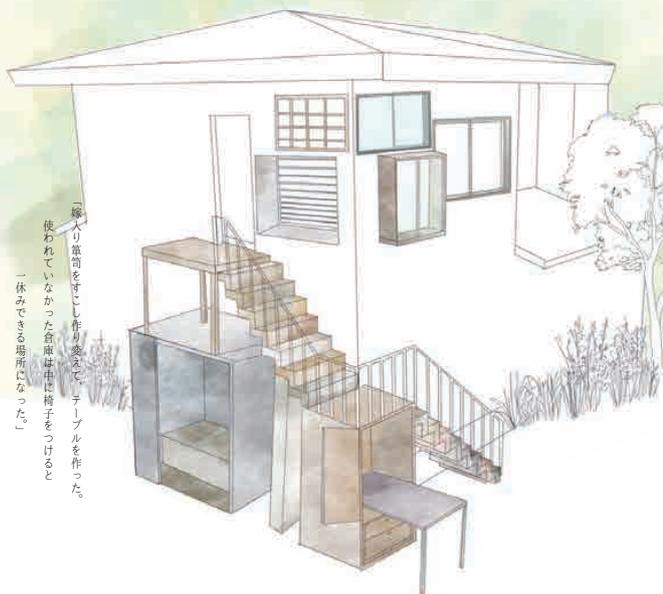
わたしは、このまちで暮らし、働くことを通じて、建築における「作る／使う」という切斷を解消したいと考えた。

わたしは、このまちとともに「生きる」ことに決めた。



もうひとつの玄関

設計事務所としての始まりに、わたしは実家の2階にあるわたしの部屋を選んだ。実家の玄関を通らずにそこから直接アクセスできるように、まずはあらたなアプローチを設けた。

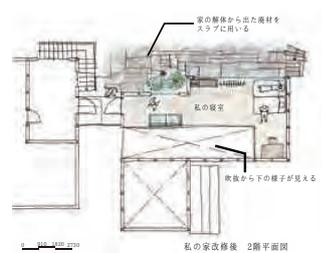
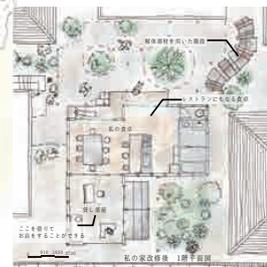


「縁取り筆筒をすじし作り換えて、テーブルを作った。使われていなかった倉庫は中に椅子をつける」と「休みできる場所になった。」



2階で繋がる部屋と部屋

実家の部屋で仕事することが手袋になってきたため、新たに近所の空き部屋を借り、打合せスペース、各間、社員食堂を設けた。私の部屋と借りた空き部屋を繋ぐ空間を設計する。この空間はわたしの事務所の延長として、そして隣接する家々の commonspace としての役割を担う。「住む」という行為しか行われてこなかったまちの中に、「働く」という行為を組み込んでいく。



住 × 働のモデルハウス

お昼ご飯の時間。空き部屋を貸してくれている老夫婦と一緒にご飯を食べることが日常となった。この家の主は、もう少しで娘さんと暮らすようになるため、この家を引き払うという。そこで私は事務所の一部でもあるこの家に住むことを決め、改修を始めた。一部は貸しスペースとしてまちに開き、地域の人々の「活動 / 働く」場所を作ることにした。

わたしの食卓であり、みんなの食堂

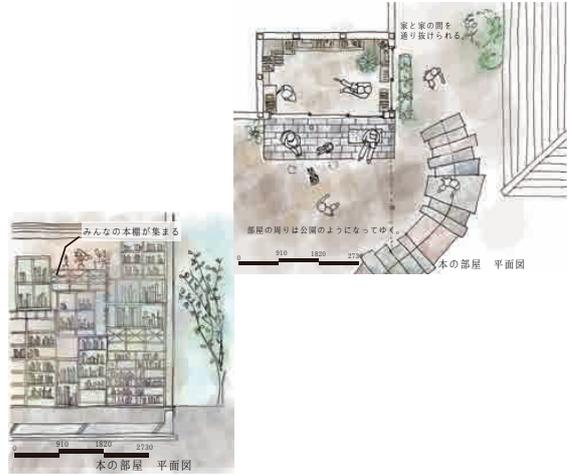
レストランを開きたいという、このまちに暮らす幼馴染にわたしの「家 / 事務所」の「キッチン / 社員食堂」を貸すことにした。
 この家のダイニングは、わたしの食卓でありながら、ときどきまちのレストランにもなる。
 昼はわたしも利用し、夜は子ども食堂としても営業を行う。
 私の仕事が終わった後は、そこで所員や近所の人とお酒を楽しむ場所となる。



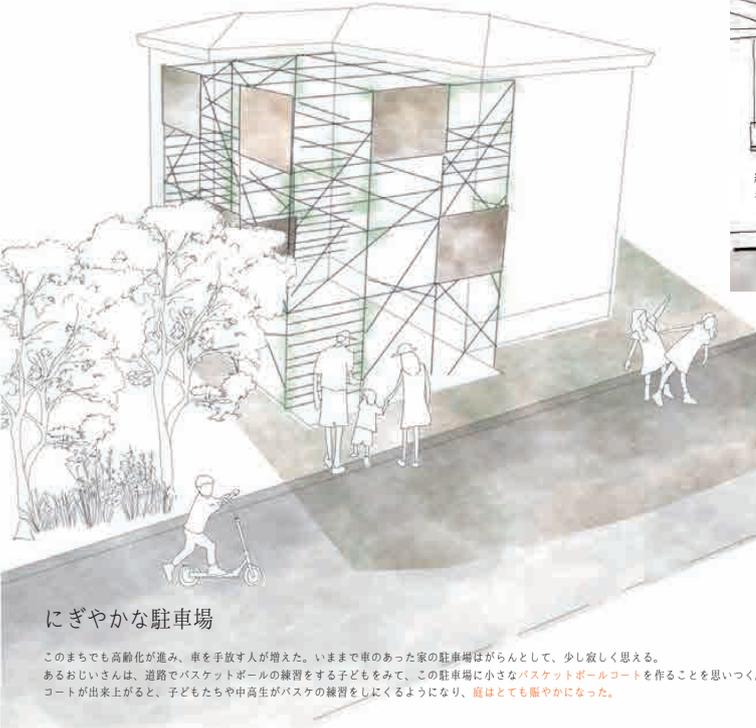
「まち」に増えた空き家でいらなくなった家具をもろって、組み合わせて使う。子どもにも大人にも合う食堂が出来上がった。

まちの図書室

ある日、事務所の書架に本や資料が入らなくなったため、新たに資料やわたしのお気に入りの本を置く場所を向かいの筋の少し離れた家の使われなくなった子供部屋を借りることにした。
 事務所の資料室を近隣の人たちにも使ってもらう。
 道に面したこの場所にはいろんな人の書架と本が集まり、それはまちの小さな図書室となった。

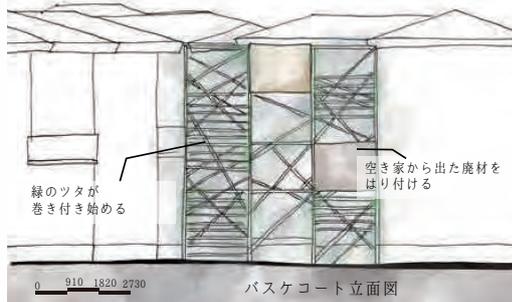


この小さな図書室の周りでは、地域の子どもや本好きの高齢者などが、本と共に思い思いの時間を過ごす。いつのまにか、コーヒーやお菓子の移動販売が行われることも。

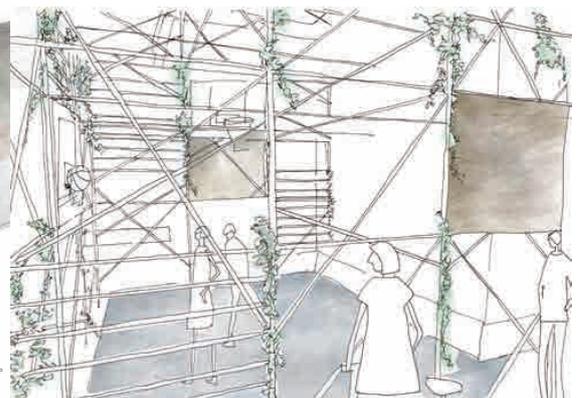


にぎやかな駐車場

このまちでも高齢化が進み、車を手放す人が増えた。いまでも車のあった家の駐車場はがらんとし、少し寂しく思える。
 あるおじいさんは、道端でバスケットボールの練習をする子どもをみて、この駐車場に小さなバスケットボールコートを作ることを思いつく。コートが出来上がると、子どもたちや中高生がバスケの練習をしに行くようになり、庭はとても賑やかになった。



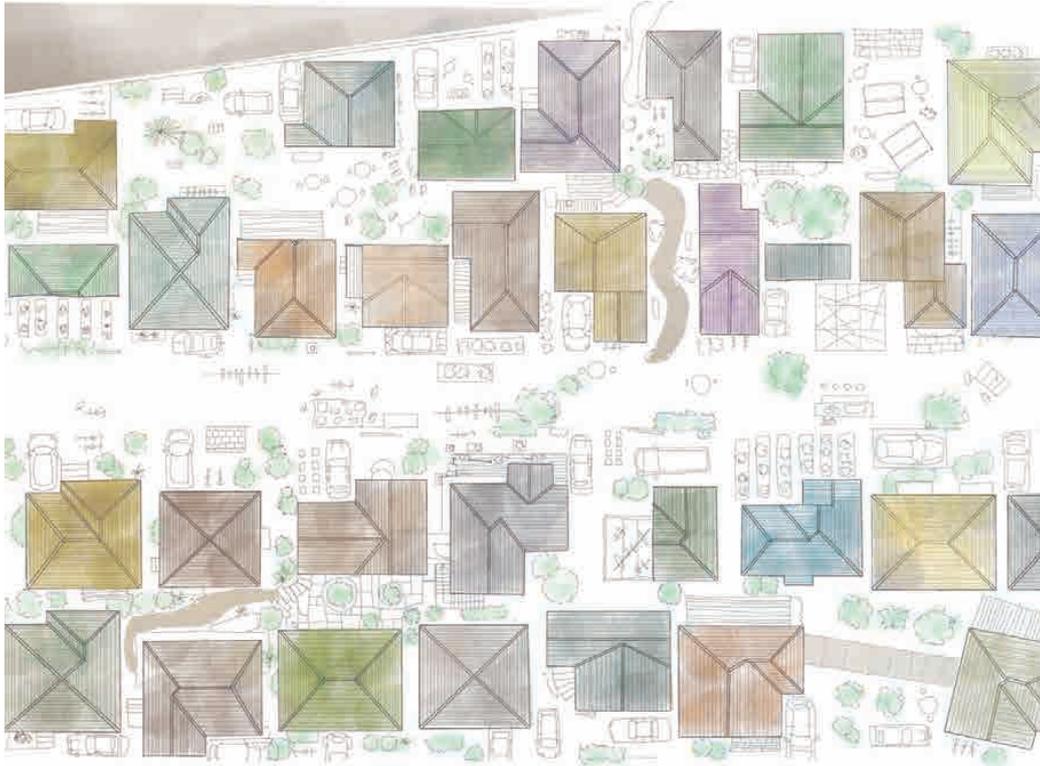
「コートの壁に空き家からもらった床板を張り付けてみる。その裏側にゴールを取り付けた。」



「パッチワーク」

一枚の布を切り分け、他の布とつなぎ合わせる。

たくさんの布の断片の集まりは新たに大きな一枚の布を生み出す。



大量生産された、同じ模様が繰り返される一枚の布として「まち」。

わたしは、画一的な「模様」としての家や家族がプリントされた一枚の「布」としてのまちを、

モノ、コト、ヒトという視点から切り分け、そしてこの断片化された小さな「布」を、

その新たな関係性の構築によって改めてつなぎ合わせた。

パッチワーク的な暮らしとまち。

人的パッチワークによって血縁の家族を基盤としながらも、そこには、緩やかな地縁の家族が生まれ、空間的パッチワークによってこれまでの孤立した「家」は解体され、まちは大きなみんなの家と化す。

「みんなの家」は、完結しない。

新たな「家族」は、新たな「家」を生成し続けるのである。

土を練り 火を焚く

00. 背景 かつてのプリミティブな暮らし方

00-1. 「土」と「火」との暮らし

人は今日まで「土」と「火」の存在に密接に関わってきた。例えば食器は陶器で作られ、風を渡ぐために壁を土で塗り、雨を渡ぐために土を練って焼くことで瓦を作った。



このように「土」と「火」は人にとってプリミティブな存在であり両者に内包される「練る」「固める」「焼く」などの行為は本来暮らしの中で当たり前に行う行為であったといえる。

00-2. 都市の「土」「火」離れ

プリミティブな生産は狭いからこそ「育む」行為が内包される。生活の中の火は地えないように見守られ、壁に隙間ができれば上から土で塗り固めるといったような時と場合に応じた行為である。



しかし、土と火から離れた都市での生活は、育む行為によって生まれる里山のな地域コミュニティをも薄れさせた。地域でのコミュニティが育まれないままの拡大によって、都市はスポンジ化などの問題を抱え始めている。

01. 敷地 歴史の堆積する地 大阪「空堀」

01-1. 位置情報

大阪市の中央区に位置する空堀地区。付近には昭和レトロな街並みや空堀を逃れた古い長屋が今なお残っている地域。



計画地付近

空堀商店街の位置する場所

01-2. 空堀における「土」と「火」の存在

そんな空堀界隈は起伏が激しく、街のいたるところに坂道や段差など、その地形に大きな特徴を持つ。



空堀界隈の地形

その理由はこの地がかつて大阪城建設のための瓦の土取場として宅地開発され、瓦の製造のために地形を掘り起こして出来たから。



瓦の共同管理

街の所々に瓦を製造するための「連唐窯」が造られ、古くは窯を築き直しながら瓦を造り続けるような共同管理の地域コミュニティが存在した。このように空堀の街並みはかつての「土」と「火」を使うことで紡がれたプリミティブな暮らしによる共同管理のコミュニティが育んできたものである。

01-3. 残れゆく共同管理コミュニティ

空堀の位置する中央区では近年常住人口が増え続け、同時にマンション建設が急増している。

新規住民が多く参入する一方で古くから空堀に住む地域住民による共同管理のコミュニティは今もわずかに残っている。



瓦の共同管理 井戸堀会議 お稲刈りの祭り

しかしマンション建設の急増と長屋に住む地域住民の高齢化などの理由から現存する共同管理コミュニティははたわつてつある。

同時に長屋自体の老朽化に伴う空き家や空き地などの物理的な「空白」もでき始めている状態である。

02. 問題提起 プリミティブさを内包する都市更新本来の在り方

使われない駐車場や空き地なども増えてくる都市の「スポンジ化」が予想されるこれからの時代において、需要に対する「空き」を新たな消費で埋めていくことは限界が来ているのではないだろうか。

現に空堀商店街付近では使われない駐車場や商店街の空き店舗が多く見られ、誰にも管理されない「空白」が増え始めている。



商店街にある物理的な「空白」

そんな今の都市だからこそ地域に残るコミュニティを活かし、地域住民によって育まれていく「プリミティブさ」を内包した暮らしの更新が、本来の都市のあり方ではないだろうか。



03. コンセプト 「土」と「火」を核とした地域の「工房」

本提案は

「今なお空堀に暮らす人々の生活に再び土と火を介させながら地域の「工房」としていくことで建物の修繕やモノの流通などを通じて共同管理コミュニティを再構築し、都市の空白に对应させていくプリミティブな都市更新」である。



土と火はどこにでも存在し、誰しもが触れることが出来ながらも、管理を必要とする。また、プリミティブな素材と技術による完成品は狭く、修繕を必要とする。そういった暮らしの中で単に建て替えていくだけでは街本来のあり方を提案する。

04. プログラム 段階的に育まれていく暮らし

空堀に住む人々の生活に「土」と「火」を介させるため、日常に根付きやすい小さな火と少ない土から、瓦や煉瓦を生産するような大きな火と掘り起こして土を使う生活まで、3段階に分けて空堀の日常を再構築し、プリミティブな地域の工房を拠点とした地域間の繋がりと街並みを育む。

phase1 火×土×再構築

キー・プレイヤー



商店街の人 小中学生 高齢者

空堀の日常に火と土の存在が介入し、料理や趣味レベルでの小さな窯の貸し借りが行われ始め、既存の共同管理コミュニティは維持されていくと同時に商店街の延長として商店街沿いにポップアップなどの小さな窯が始まっていく。

小さな火と少ない土 → 触れ合うきっかけをつくる

phase2 火×土×生産

キー・プレイヤー



製造業者 高齢者 小中学生

Phase1の窯にある空き室が徐々に解体され始め、本格的に土が生活に浸透していく。大きな窯が出来ると瓦や煉瓦などの建築材料がつくれる空堀工房の拠点として機能し始める

大きな火と掘り起こされる土 → 生産行為を通じた地域のつながりを形成

phase3 火×土×流通

キー・プレイヤー



アーティスト 観光客 子育て夫婦 高齢者 小中学生

空堀に点々と存在する「空白」が修繕、活用され始め小さな工房が立ち上がり、空白をビルや駐車場といった消費で埋めるのではなく管理の必要な土や火を使う工房という形で埋めていくことで空堀の街並みは育まれていく

様々な土と火 → 瓦・煉瓦・土などの流通を通じた街と暮らしの更新が行われる

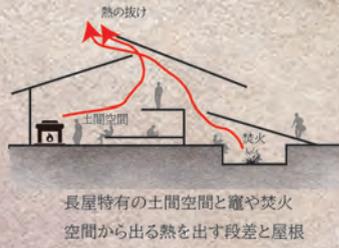
本提案は、人にとって最もプリミティブな存在である「土」と「火」に価値を見出し都市に生産とモノの流通機能を付与する「工房」を提案することで都市を再び育てていくきっかけをつくる事を目的とする。



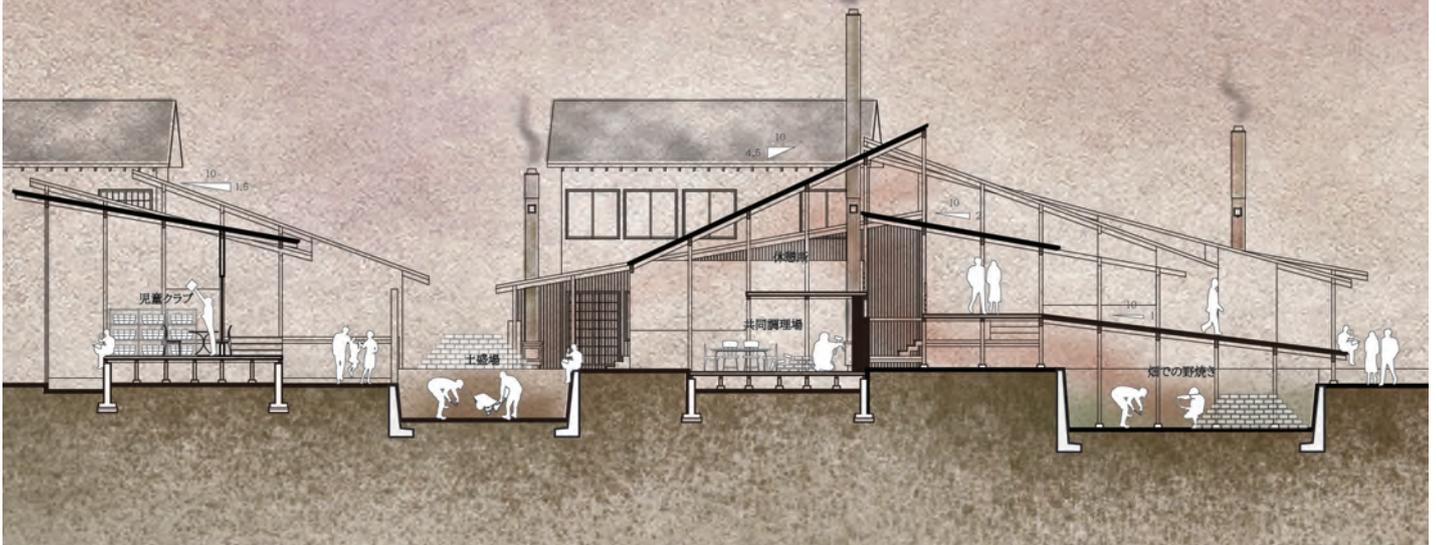
Phase1 火×土×再構築



空間構成DIAGRAM



主に行われるプリミティブな行為



Phase2 火×土×生産

浸透し始める土と火

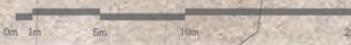


掘られた土で補修を繰り返す事で育っていく街のシンボリックな窯

修繕を要する空き家などへ出荷されていく
→Phase 3へ

工房全体を見渡しながらほっと一息つく場

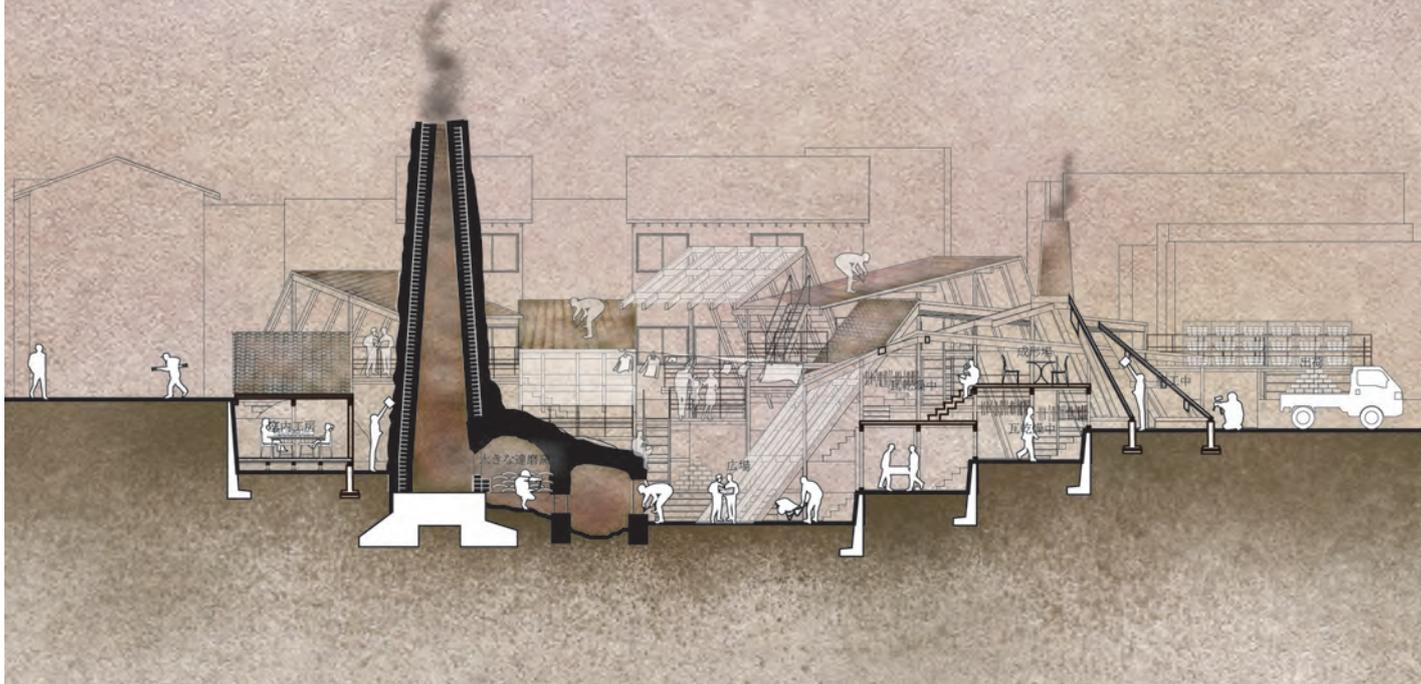
配置図兼平面図 S=1:400



空間構成DIAGRAM



主に行われるプリミティブな行為



Phase3 様々な土×火

育まれる空堀へ

かつては「土」と「火」によって育まれた空堀。

今では失われたプリミティブな暮らしは、長い年月をかけながら再び浸透していく。
再び育まれる空堀の街並みと暮らし方が、土地の記憶となり多くの人々に受け継がれますように。



小さな作業場

個人用の家具や Phase 1 でポップアップを開くための制作物などがつくられる



窯が置かれた街の休憩所

釜が空堀の街中にも作られていくことで火を共に囲みながら一息つける場所が生まれる



土が盛られた子供たちの公園

土の流通が始まり、空堀内に土が溜まっていくと同時に子供たちの小さなたまり場ができて始める



共同アトリエ

アーティストを中心とする、流通する瓦や煉瓦を用いた建物の補修またはデザインが始まっていく



廃材交換所

建築材料のフリーマーケット。
Phase 2 で余った材料や空堀にある空き家から出る廃材などが交換される

不浄払拭する丘

地方の終末処理場は、赤字等によって事前の増築予定が頓挫され、更地のまま放置されている。残された敷地は不浄であると決めつけられ、開発されない。このイメージを払拭し、自然や人が集う場所を提案する。



01. Background

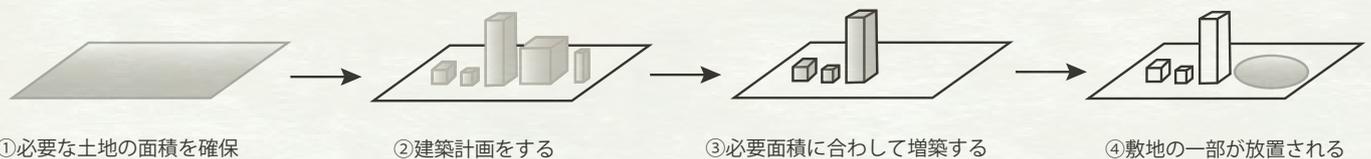
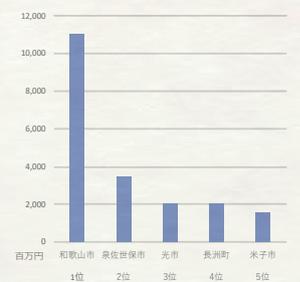
●下水道事業の赤字

1900年代後半の下水道事業は下水道普及率を増やすように計画を立てられていた。しかし、現在の地方都市の普及率は未だに低い。その理由は、無理に拡張しようとした下水道拡張計画、地震等の天災における下水道断裂の修復、人口減少による税金の割当額の低下となっている。

●終末処理場の建築方法

問題を提起するためには終末処理場や下水処理場の建築計画を知る必要がある。終末処理場等の建築計画は最終的に到達するであろう下水供給人口に必要な処理面積を算出し、あらかじめ土地を確保する。そして、現行の供給人口に必要な面積に合わせて増築を繰り返す計画となっている。

下水道事業赤字額ワースト5 (平成18年度)



02. Problem

Background から生じた問題は、赤字経営を余儀なくなった下水処理施設が、事業計画が頓挫することになり、増築予定だった敷地は更地のまま放置される事になったという問題である。その結果、下水処理場は不浄であるという印象が強いため、その更地を再利用する計画案もできることがほとんどなく、敷地が放置されてしまうという問題が生じさせることになった。

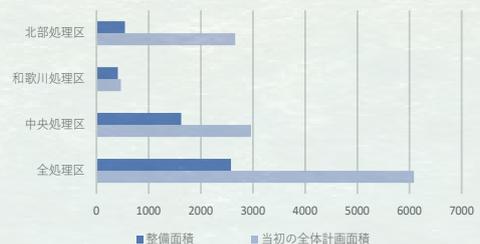
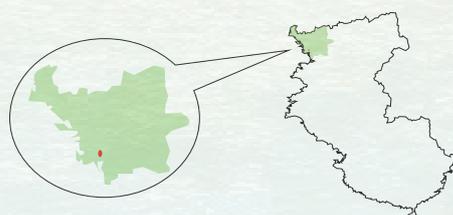
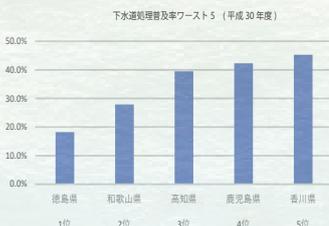
03. Site

●地域の選定

下水道事業赤字額を調査することで計画が大幅に変更せざるを得ない場所である和歌山県和歌山市を選定する。

●施設の選定

和歌山市には、稼働している3つの処理施設がある。そして、その中で築年数が50年近くになるにも関わらず整備面積の到達割合が少ない中央終末処理場を対象にすることにした。

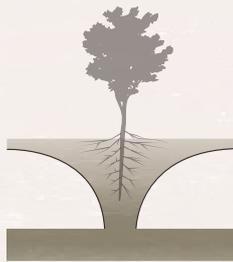


04. Concept

最終的に市民が近寄りやすい更地から、市民が親しみやすい様々な体験ができる複合施設を提案する。

05. Derive

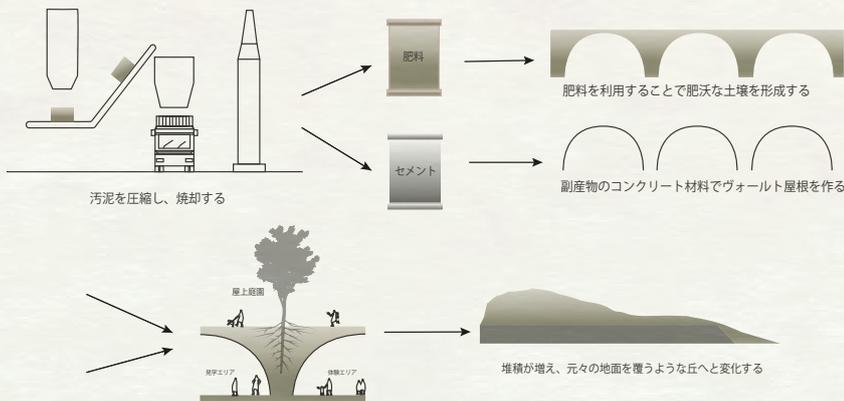
ヴォールトの隙間に土や新鮮な肥料、植物で埋まることで土を肥沃にし、土壌の不浄さを視覚的または物理的に解決し、土に呼吸をさせる。



この土地は川と人と橋が共存していた。そこでその橋という形に着目し、建築的要素であるヴォールトから派生させた。

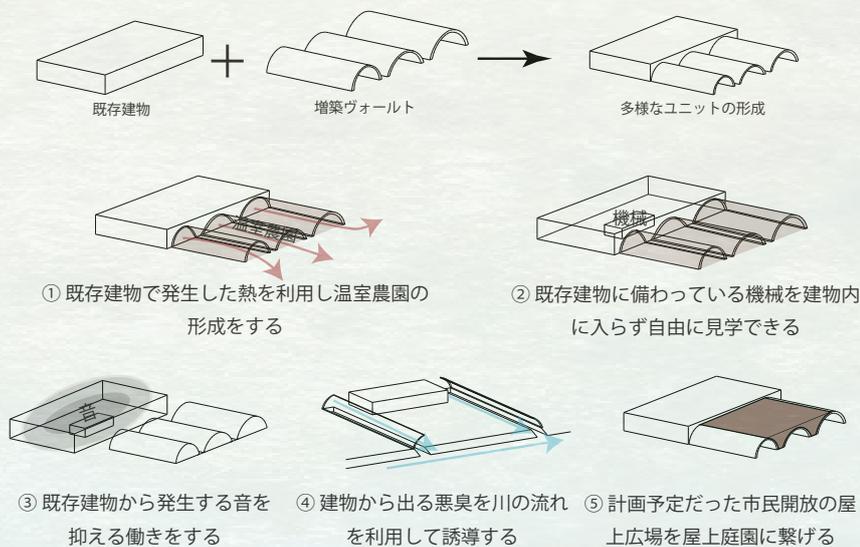
06. System

既存建物の副産物である汚泥から肥料とセメント材料を抽出し、ヴォールト屋根と組み合わせる。それによって地盤レベルである土地が上階に持ち上げられ、自然と構造体が一体化する断面形状を作った。



07. Combination

既存建物にヴォールトを組み合わせることによって、既存建物から漏れ出るエネルギーや空間を操作する。



① 既存建物で排出される熱をヴォールトを介して農園（植物工場）を作る



② 普段、見学できない機械の形状と社員の作業を見ることができる



③ 音を漏らしたくない方向にヴォールトを作り、防音する



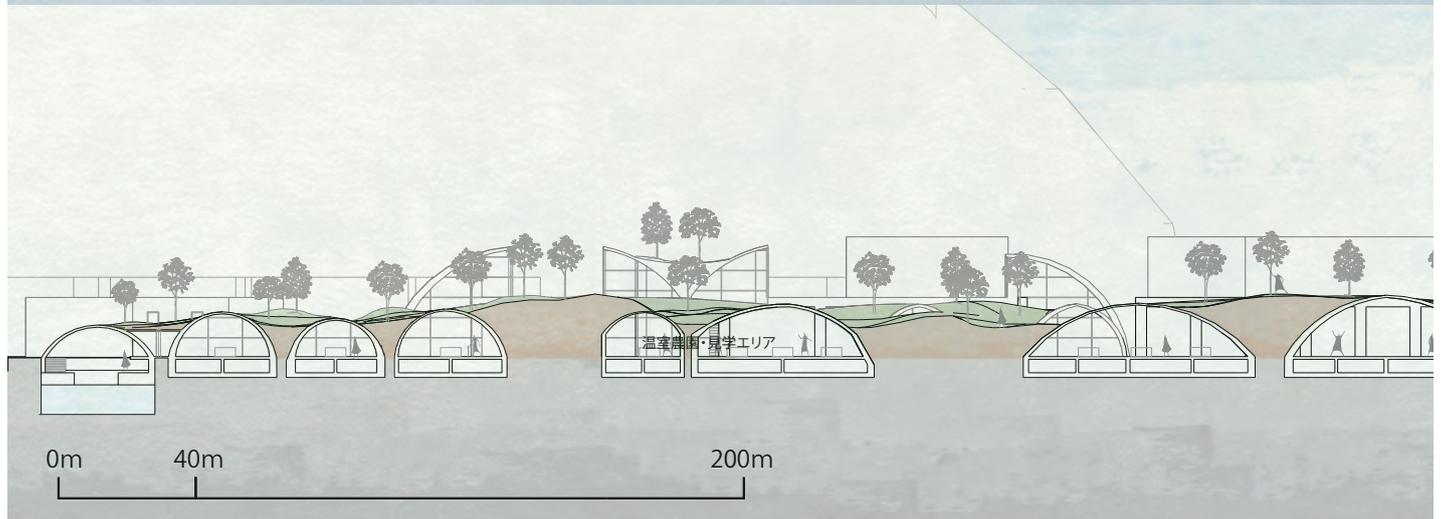
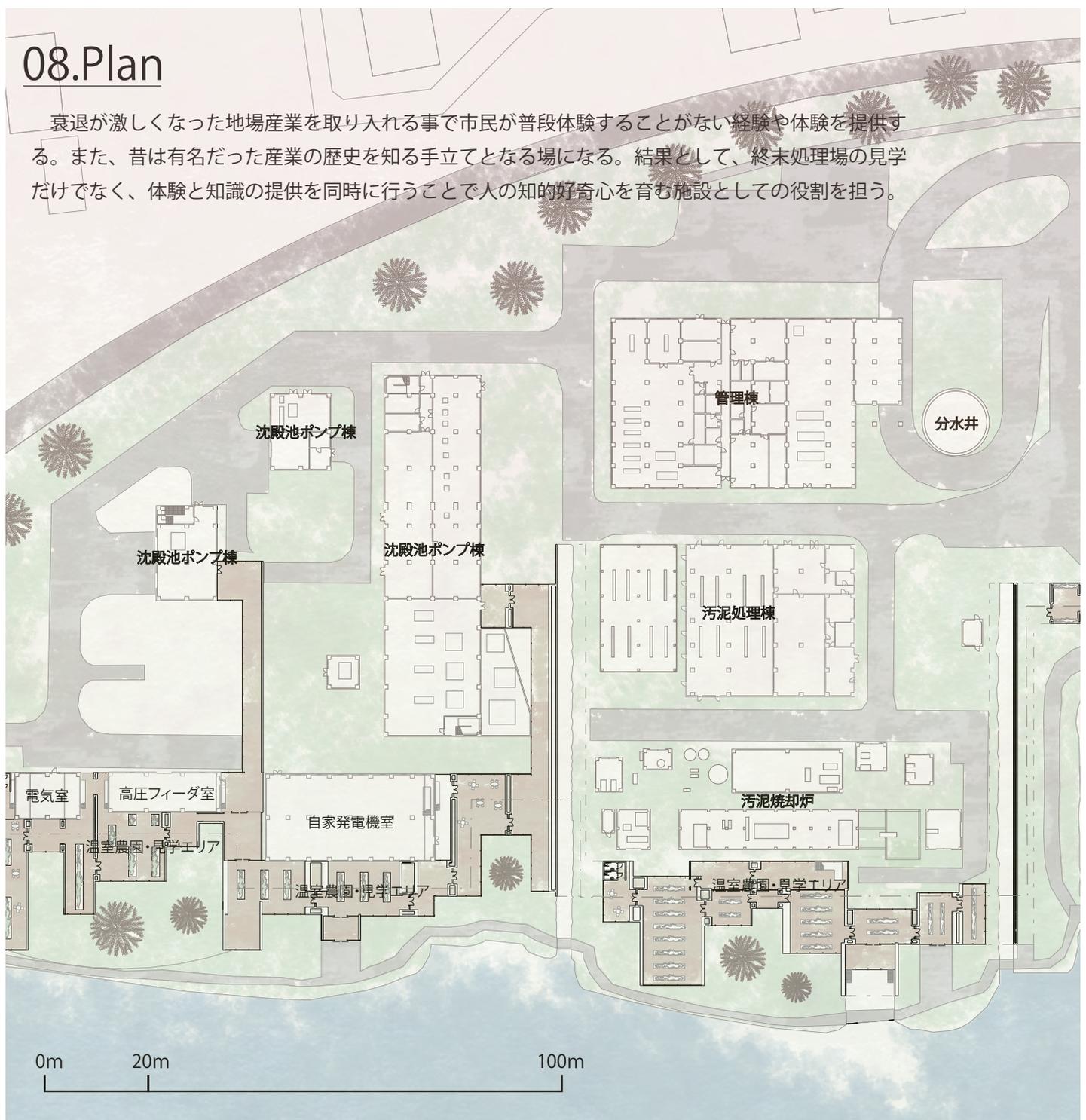
④ 重い空気である臭いを高さで半ヴォールトを使って誘導する

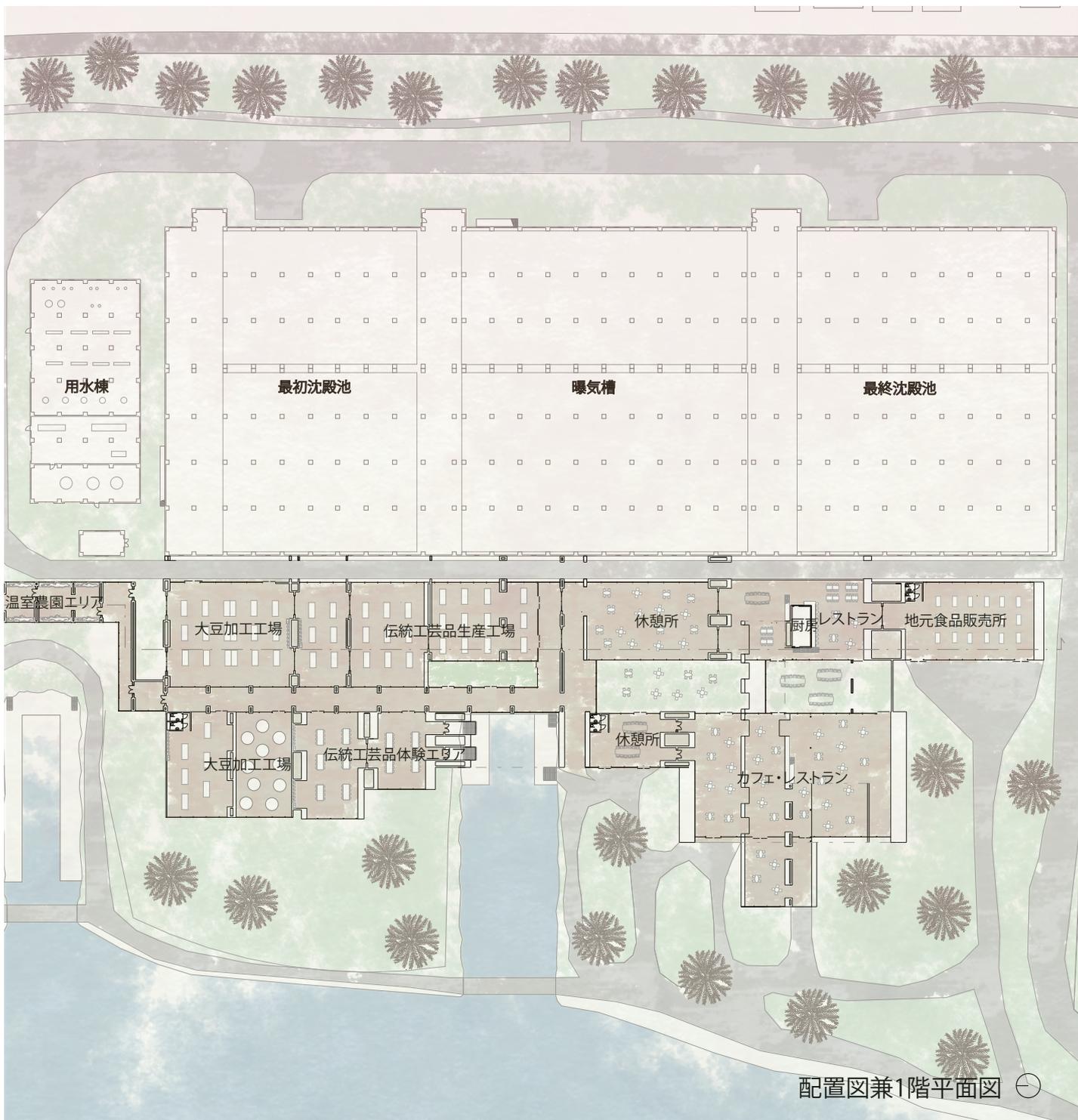


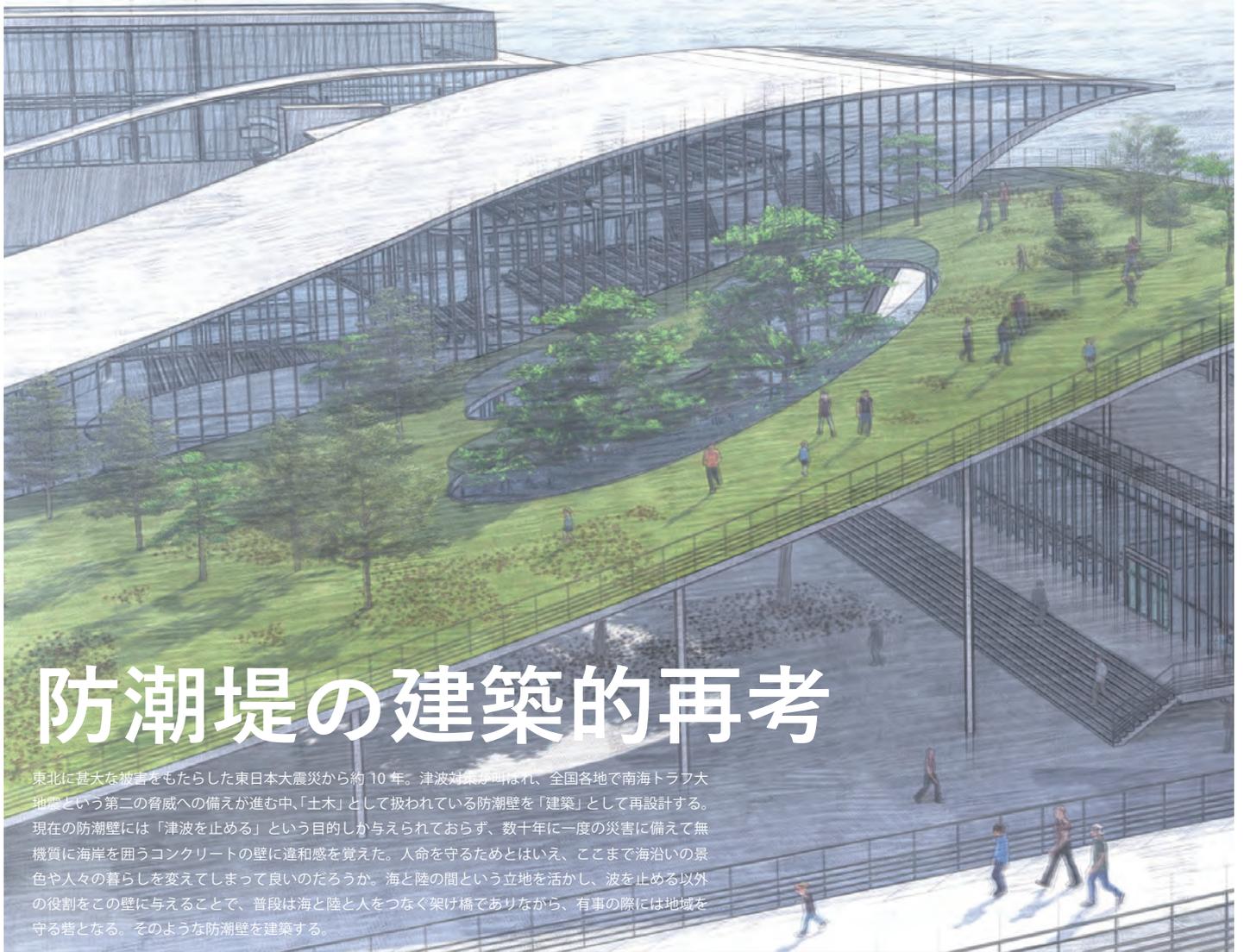
⑤ 計画頓挫によって閉ざされた空間を開かれる空間にし、拡張する

08.Plan

衰退が激しくなった地場産業を取り入れる事で市民が普段体験することがない経験や体験を提供する。また、昔は有名だった産業の歴史を知る手立てとなる場になる。結果として、終末処理場の見学だけでなく、体験と知識の提供を同時に行うことで人の知的好奇心を育む施設としての役割を担う。







防潮堤の建築的再考

東北に甚大な被害をもたらした東日本大震災から約10年。津波対策が叫ばれ、全国各地で南海トラフ大地震という第二の脅威への備えが進む中、「土木」として扱われている防潮壁を「建築」として再設計する。現在の防潮壁には「津波を止める」という目的しか与えられておらず、数十年に一度の災害に備えて無機質な海岸を囲うコンクリートの壁に違和感を覚えた。人命を守るためとはいえ、ここまで海沿いの景色や人々の暮らしを変えてしまって良いのだろうか。海と陸の間という立地を活かし、波を止める以外の役割をこの壁に与えることで、普段は海と陸と人をつなぐ架け橋でありながら、有事の際には地域を守る砦となる。そのような防潮壁を建築する。



既存の防潮堤の課題

東日本大震災の被害を受けた東北沿岸部では防潮壁の建設が進んでいる地域もあるが、海辺の景観が損なわれていることによる付近住民への心理的悪影響がとてつもない。それに加え、景観の悪化から観光業の衰退を招いている地域もある。また建設工事の際の森林伐採及び土壌改善に伴う周辺の自然環境の変化により、それまでは海辺を住みかとしていた生き物たちが行き場を失ってしまった結果、生態系を破壊してしまう問題が発生している。その結果、漁業までもが衰退するなどの問題が発生している。これらの問題から近隣住民の反発を招き、工事が思うように進まない。あるいは住民の声を無視しながら強引に工事を進めている地域も少なくない。



プログラム

防潮堤と複合施設が一体となった建築物を設計する。壁で区切るのではなく、海と陸をゆるく繋ぐ。この防潮壁があることで、より海に親しめるような施設。従来の防潮堤とは異なり収益が見込めるため、財源への負担は少なく済む。その結果同様の津波対策が多くの地域で進んでいく。また、災害時を第一に設計し、津波を止めるという目的はもちろん、災害を受けた後のことまで想定して各設備を配置する。具体的には広い体育館と駐車場・備蓄倉庫や浸水対策（1Fのかさ上げ）などが挙げられる。



普段

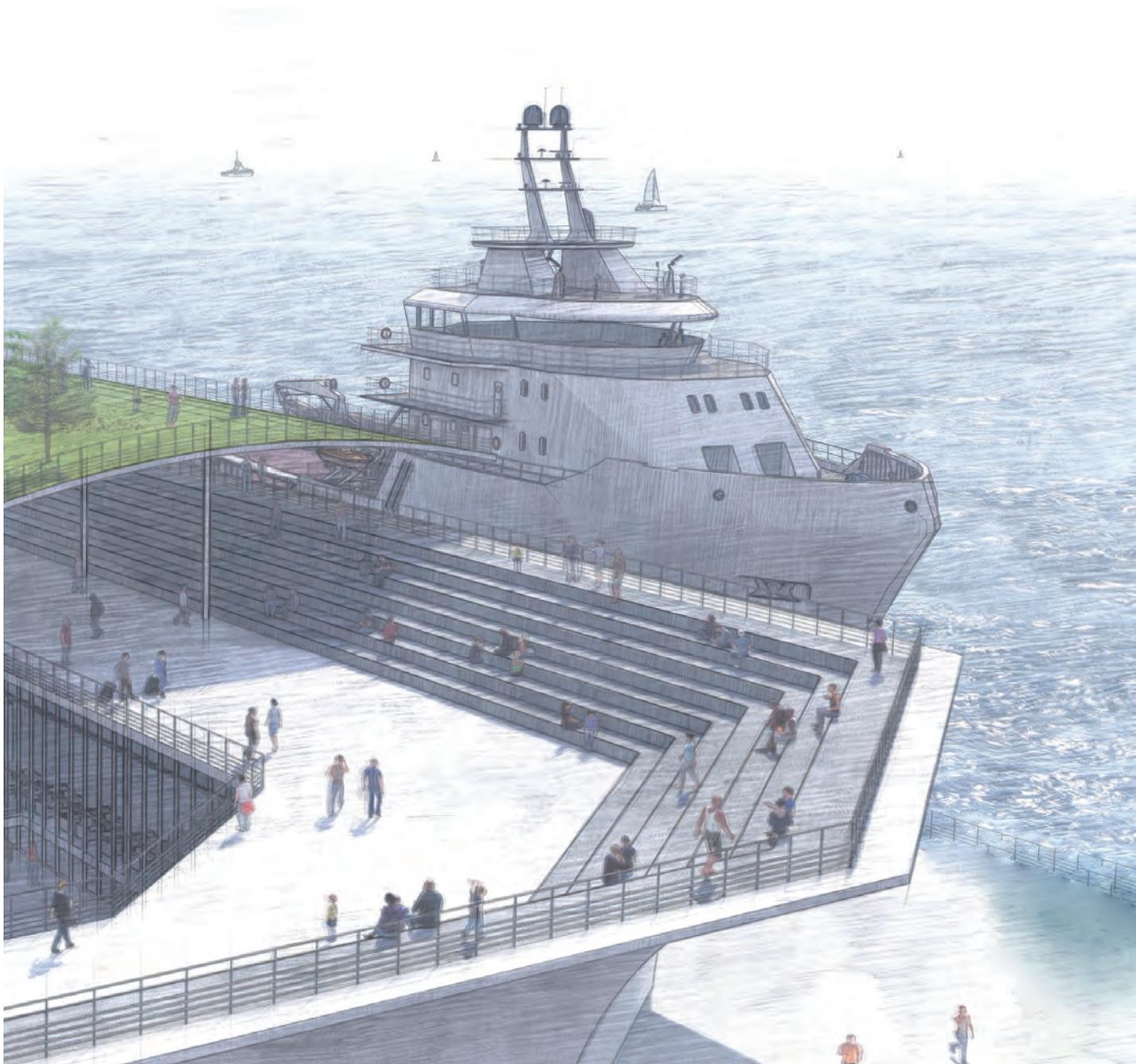
名古屋港を一望できる観光スポットとして、港区を代表する施設となる。また、商業施設や体育館、イベントスペース等を併設することで地域に密着。観光客の増加にも寄与。

災害時

高さ10数メートルの防潮壁となり、津波から港区を守る。また、ガーデンふ頭の来訪者の緊急避難場所となることで、海辺にいた人々を一刻も早く安全な場所へ誘導することができる。

災害後

仮設住宅として機能。家を失った人々のよりどころに。また情報管理や行政の機能回復までの仮本部の設置などを想定し、港区の復興拠点となる。



計画敷地「名古屋港ガーデンふ頭」

元々、開港以来の主要外国貿易施設であったガーデンふ頭。港が拡大し物流拠点
が南下するなか、地元からの要望を受け「親しまれる港づくり」をコンセプトに
再開発が始まった。ふ頭内には多目的広場や博物館、水族館、商業施設、遊園地
があるほか、大型旅客船バースを備え国内外の豪華クルーズ船や帆船などが接岸
する。船の一般公開やガーデンふ頭臨港緑園内のつどいの広場などでのイベント
も多いこのエリアは一年中、名古屋市内外から訪れる人で賑わっている。

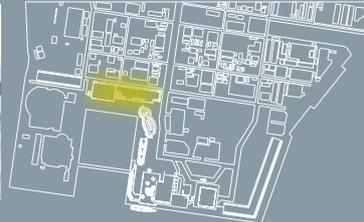
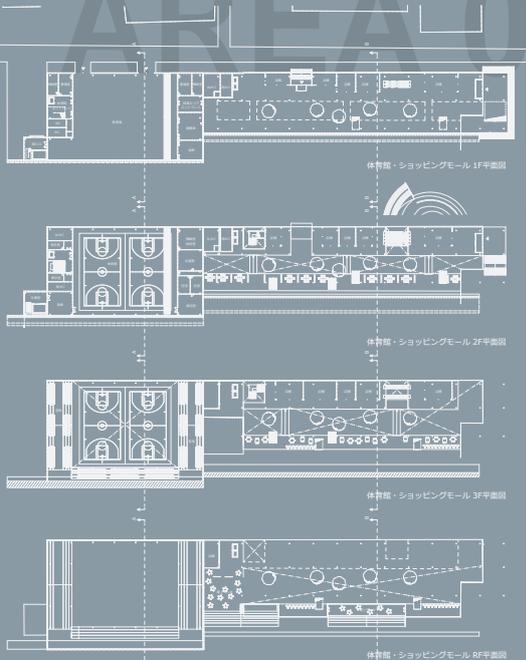


防潮壁建設予定地
計画敷地

ふ頭であるため、もちろん南海トラフ大地震による甚大な被害が想定されており、
地震発生から103分で2.4mの津波が到達するという予想もある。そのため防波
堤や防潮壁、膨張扉といった防災施設の整備が名古屋港全体で進められており、
ガーデンふ頭では実際に防潮壁の建設が予定されている。

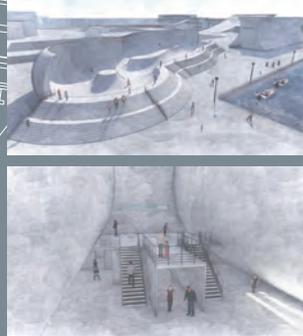
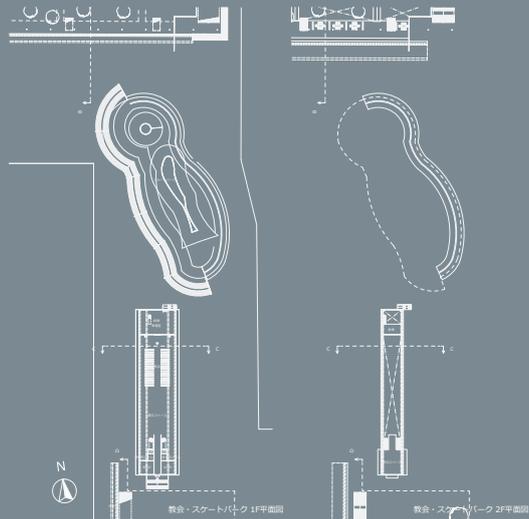


GYM + SHOPPING MALL



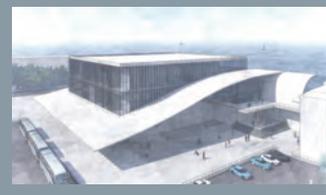
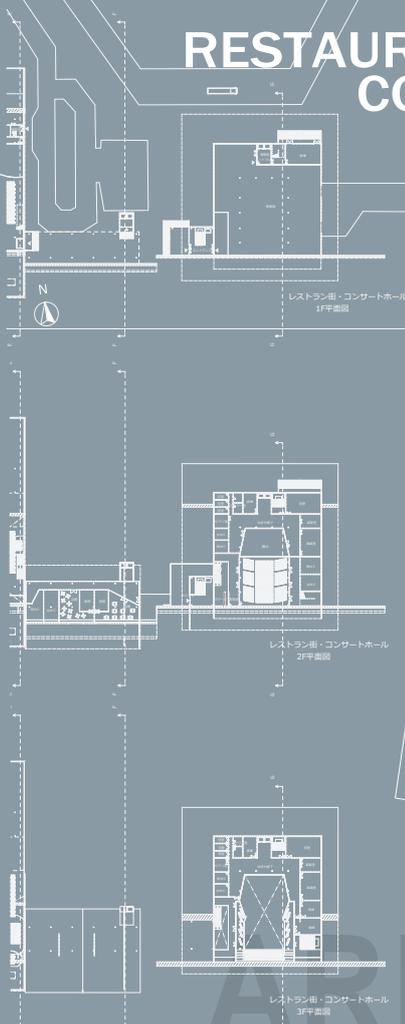
AREA 01

CHURCH + SKATE PARK

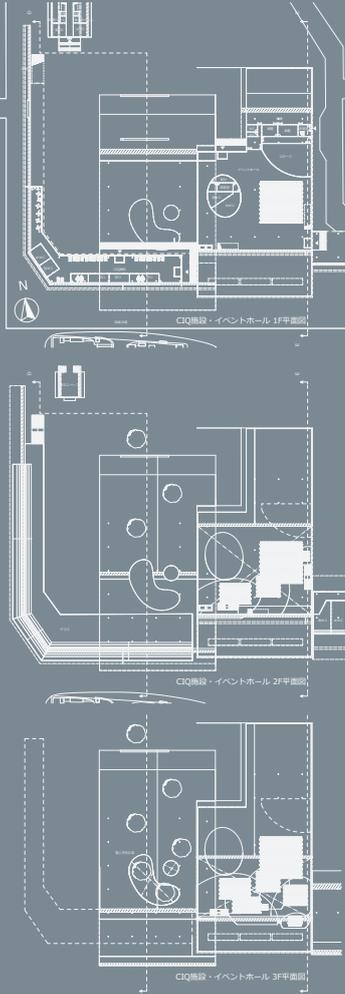


AREA 02

RESTAURANT + CONCERT HALL



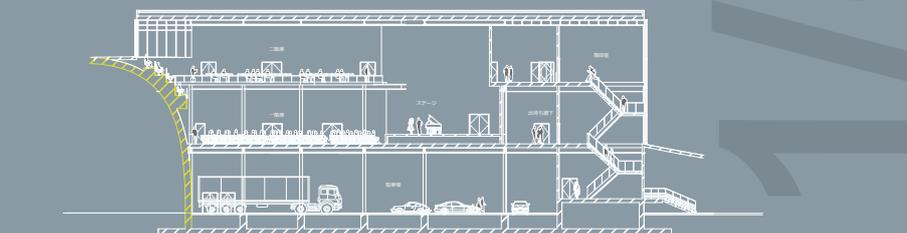
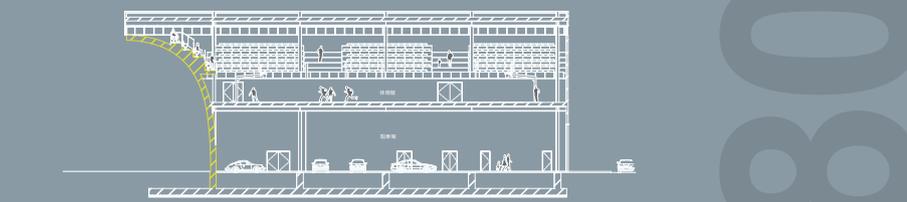
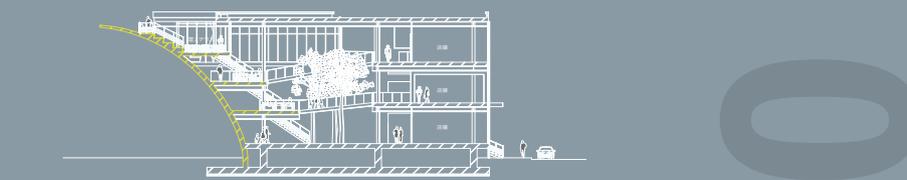
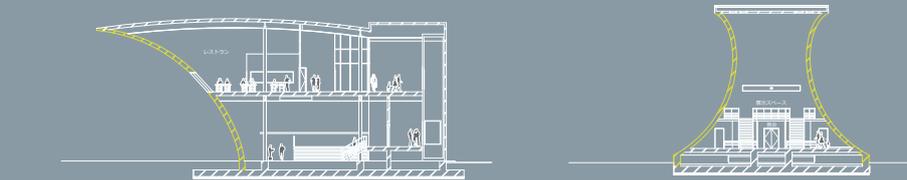
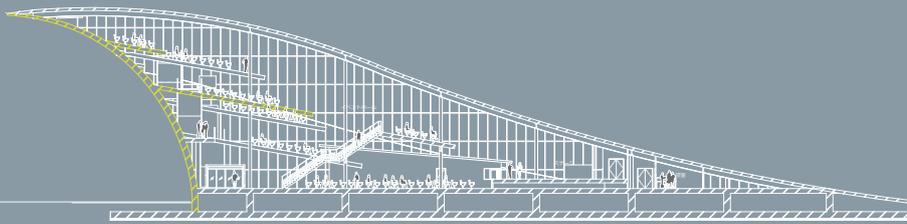
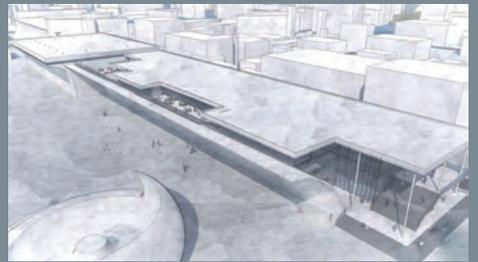
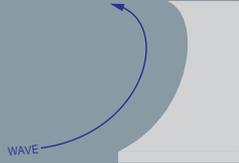
CIQ + EVENT SITE



AREA 04

CROSS SECTIONS

断面線を黄色にしている部分が湾曲型防潮壁である。この壁は津波の波動エネルギーを「止める」というよりは「はね返す」ことができる形として近年注目されており、同じ材質、強度、高さの直立壁と比較すると、より効果的に津波被害を減らすことができるとされている。「波返し工」という名前で波が跳ね返るのを防ぐため、堤防の上面に設置されているものもあるが原理と効果は同じで、それを大規模化することで津波にも耐えることができるようにしたものである。本設計では海側の壁すべてにこの形状を採用し、実際にガーデンふ頭で計画されている防潮堤計画よりも優れた防波性能をもった計画となっている。しかし、既存の建物の壁を湾曲したものに置き換えただけでは「建築的再考」とは言えない。波をはね返す側面ではなく、むしろ屋内側の凸面をどう利用するかが重要である。この形の壁だからこそできる室内側の機能をより多く持たせ、室内側に居心地のいい空間を作って初めて「建築的」と言えるのではないだろうか。それこそが本設計のテーマである。



1800

物語茶室

日本昔ばなしと茶道具



「物語茶室」は、日本昔ばなしと茶道具をモチーフにした茶室である。明治時代に日本各地から集められ、編纂された「日本昔ばなし」は、非常に親しまれており、その内容は多くの人に知られている。そんな「物語」と、現代人には敷居が高いとされる「茶室」を組み合わせることによって、茶道に興味を持ってもらい、少しでも茶道の文化を後世に残すことを目的にしている。

全国7カ所に茶室をつ

この茶室は、それぞれの物語の発祥地である7つの地域に建てており、茶室と茶道具の保管・管理の機能を持っている。茶室の他に、茶道具の保存場所をつくることで、近年著しい茶道具・茶器の海外流失を防ぎ、茶室を通して、地域の伝統工芸品や地域の茶道具を保護する。



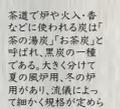
齢庵(れいあん)
 授庵(じゅあん)
 慈庵(じやくあん)
 治庵(じあん)
 淀庵(てんあん)
 煌庵(こうあん)
 響庵(きやうあん)

浦島太郎
 笠地蔵
 竹取物語
 桃太郎
 一寸法師
 花咲か爺さん
 分福茶釜

茶箱
 仕覆
 茶壳・柄杓・茶杓
 掛け軸
 茶碗
 湯炭
 茶釜



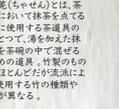
茶箱
 茶箱とは、茶箱(ちやばこ)は、茶道具の一種で、点前道具一式を収納して持ち運ぶための箱である。籠形の場合は茶籠(ちやかご)と呼ぶ。また茶の輸送・保管用の箱も茶箱と呼ぶ。



湯炭
 茶道で伊や火入、香などに使われる炭は「茶の湯炭」「お茶炭」と呼ばれ、黒炭の一種である。大きく分けて夏の風炉用、冬の伊用の2種類があり、炭質によって細かく規格が定められている。



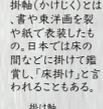
茶釜
 茶釜(ちやがま)は、茶の湯に使用する茶道具の一種で、茶に使用する湯を沸かすための釜のことである。風炉に用いる茶釜はとくに風炉釜(ふうろがま)と呼ぶ。



茶壳
 茶壳(ちやせき)とは、茶道において抹茶を点てるのに使用する茶道具のひとつで、湯を加えた抹茶を茶碗の中で混ぜるための道具。竹製のものが多いが、流石により使用する竹の種類や産地が異なる。



仕覆
 仕覆(しふく)とは、茶入や薄茶器、茶碗などの茶道具を入れる袋である。茶道具を守る意味もある仕覆には、茶人が道具を大切に思う気持ちが表現されている。



掛け軸
 掛け軸(かけじく)とは、書や東洋画を製や紙で表装したもの。日本では床の間などに掛けて鑑賞し、「床掛け」と言われることもある。



茶碗
 茶碗の種類には、井戸茶碗・筒茶碗・平茶碗・天目茶碗などがあり、代表的な茶碗の種類だけでも、多くの数が存在する。

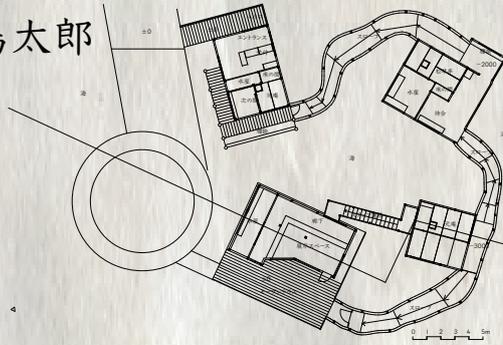


齢庵

浦島太郎

敷地：神奈川県横浜市横浜北水鏡灯台東洋

敷地の北には工場跡が広がっており、東には赤レンガ倉庫など、商業施設が立ち並んでいるが見える場所である。浦島太郎の発祥地の一つとして知られている横浜だが、現在は浦島太郎のようにキレイな沖や亀は見つかることができない。近年は横浜の海をキレイにしようと取り組みが行われているが、失われてしまった景色は元には戻らない。



茶室を茶箱に見立てて、茶箱の構造通りにそのまま茶室にした。各々、茶人が好んだ茶箱の中には、その茶人が設計した茶室を入れ込んでいる。



きんま茶箱



起のんびりと漁師を楽しむ浦島太郎

橋立茶箱



承子供たちにいじめられていた亀を助ける

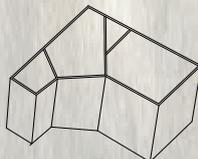


結玉甲箱を受け取る



宗偏流 江戸時代の茶箱

輕 竜宮城へ向かう



織田流 煎茶茶箱

元庵

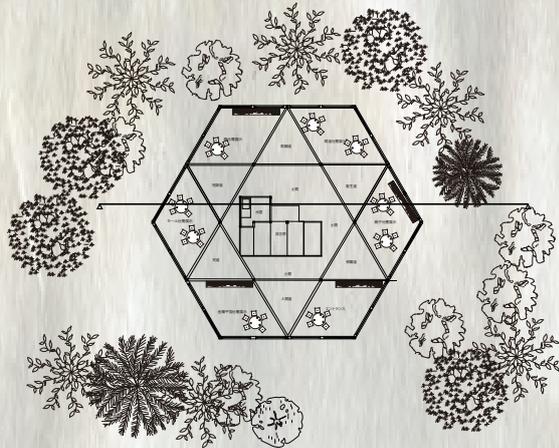




授庵 笠地蔵

敷地：岩手県江刺郡 歴史公園えさし藤原の郷
約20ヘクタールの敷地に、日本で唯一、平安貴族の住宅、寝殿造の建物を再現した「伽羅御所」や、武家館を再現した「経清館」、「清衡館」、政治を司る「政庁」など、大小約120棟の建物が建てられており、四季折々には、桜やサツキ、紫陽花、睡蓮、萩、紅葉などの花々が楽しめる。この優美な情景と、笠地蔵の話が対照的に映る。

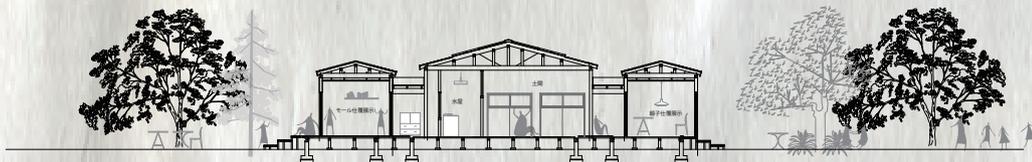
仕覆と地蔵は、日本人の、大事なものには良いものをかぶせたいという心情を表したものであると考える。
建物は、仕覆の広げた形をイメージ。仕覆の布は同じ形をつなげて、入れる茶器の大きさによって多くなったり、少なくなったりすることから、この茶室にも応用出来ないか考えた。
この茶室も薄い壁のパーテーションで空間が大小し、入らなくなったら布地を1枚取ってまた新たな茶器を包む仕覆のように、パッチワークのようにになっている。



天道…悩みや苦勞がなく、楽しいことに満ち溢れた世界です。しかし、天道といえどもいつかは死がおとずれ、幸せな世界から立ち去らなければいけない悲しみや恐怖があります。

人間道…人間が住む世界です。苦しみもたくさんありますが、仏教を修めることで輪廻を抜ける可能性がある唯一の世界です。

修羅道…戦いや争いが絶えることがない世界です。
畜生道…牛や馬など、弱肉強食の畜生の世界です。
餓鬼道…飢えと渇きに常に苦しむ世界です。
地獄道…六つの世界で最も過酷な世界です。苦痛が絶えず続くと言われていいます。



惹庵 竹取物語

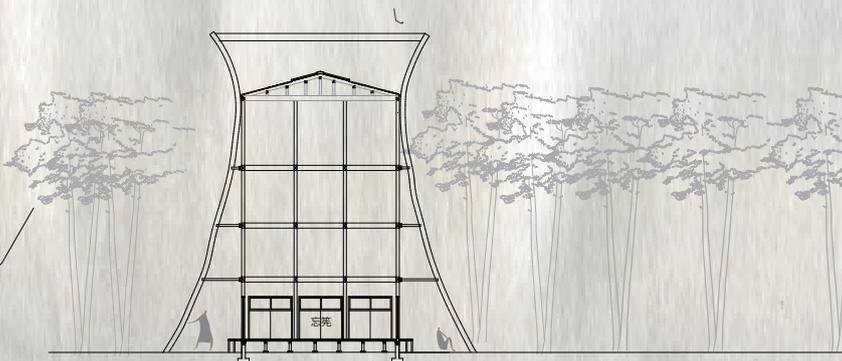
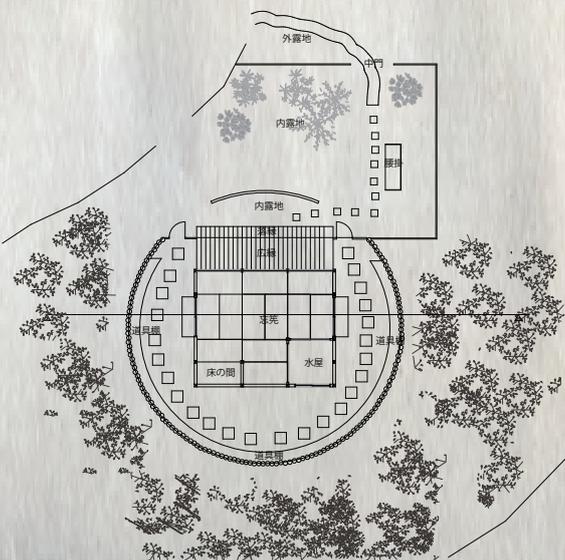
敷地：静岡県富士市竹採公園
竹取物語の発祥地である、富士市に位置する公園。敷地内には竹が生い茂っており、敷地外からは見えなくなっている。

竹取物語の話に出てくる竹をモチーフに、かくや姫が帝に残した不死の薬を富士山で焼くシーンを、茶事を行いながら、体験出来るように再現した茶室である。
茶室の周りを囲んでいるのは、本物の竹。
竹を湾曲させて建物を維持するためには、茶事を行って湿度を一定に保つ必要がある。



茶事で使用する竹道具の技術を参考にしてつくった茶室である。

また、天井は、開閉式になっており、晴れた夜には、月や星を見ながら茶会を楽しめる。

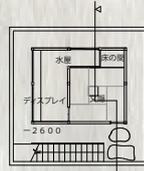
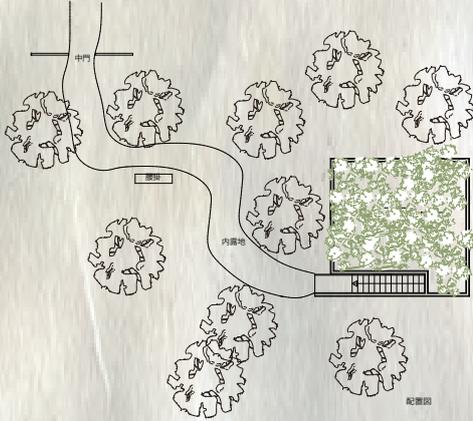




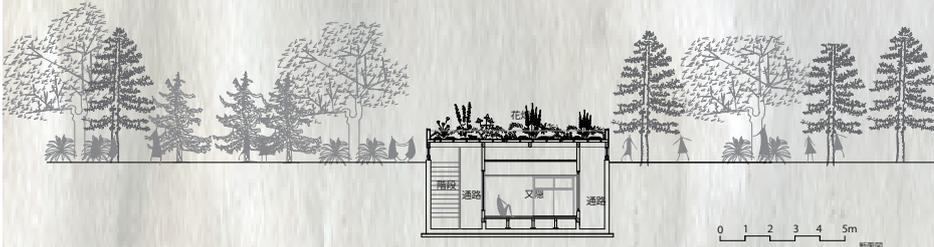
煌庵 花咲か爺さん

敷地: 広島県芸北町備北広陵公園
花咲か爺さんの発祥地は、中国である。広島県芸北町には、中国から伝わった逸話が伝えられていることから敷地に選んだ。

亡くなったシロの遺灰が花を咲かせたエピソードを茶室にした。
灰が埋めてある場所の上部に花畑をつくり、壁・天井は炭で建築してある。
炭は植物にとって、栄養となることもあり、植物との相性はよい。



0 1 2 3 4 5m 平面図



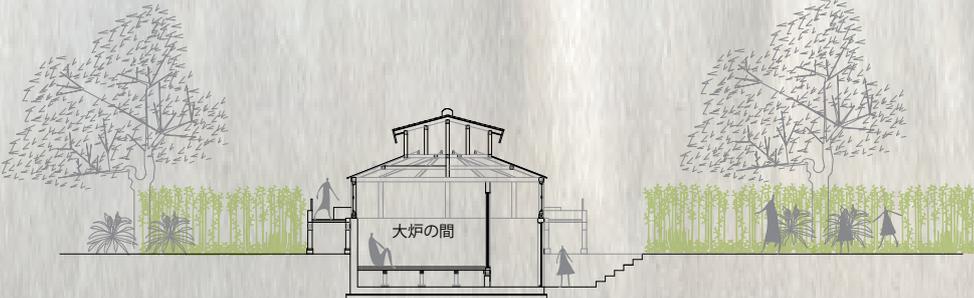
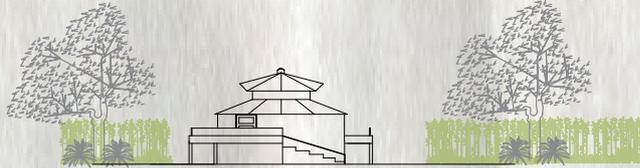
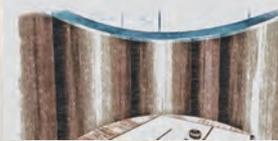
0 1 2 3 4 5m 断面図



響庵 分福茶釜

敷地: 群馬県館林市 茂林寺
分福茶釜の発祥地である茂林寺。このお寺のおしようさんが大変人気で、いつも来訪者があったことから、釜がいつもかけてあった。そのことから、福を分ける茶釜として伝説が残っている。また、ぶんぶくという釜が湧く音と分福とをかけている。

分福茶釜は、その名の通り、福を分ける茶釜という意味と、ぶんぶくという茶釜が沸く擬音語からそう呼ぶようになったと言われている。
実際に茂林寺に言い伝えが残っており、多くの人びとが寺に訪れたことから、休む暇もなく常に湯が沸き、茶をふるまう茶釜として有名になった。
福を呼ぶ茶釜(分福茶釜)のように、たくさんの人に訪れて欲しいという思いから、茶室のわずかな開口部からは、内部で響いた音が漏れ出る構造になっている。開口部のそばには展望台を設け、敷地である沼地を一望できるようにしている。



0 1 2 3 4 5m 断面図

2020年10月20日

始まり

5人の仲間と共に、ある街のある住宅を借りて生活を始めた。
築約30年のこの住宅は長屋をガレージへと改装しており、夏場は暑く、冬場は寒い。とても住めるような場所ではない。しかし、シャッターを開ければ街と接続され、開放的な暮らしができる。そんな心地よさに惚れ、この住宅を借りることになった。

「ここって何屋？」

ガレージのシャッターは常に開け、そこに大きな机を置いて生活していた。シャッターが常に空いているので、「ここって何屋？」とよく聞かれた。僕たちは街に対して、オープンな生活をしており、目の前で小さな出来事がたくさん起きている。

おすすめ

夏に差し掛かろうとした頃、僕たちは家庭菜園を始めた。僕たちだけで食べるのはもったいないと感じ、いつもお世話になっていた周りの住人におすそ分けした。すると、たくさんのお礼状を頂戴するようになり、いつしか、僕たちの生活は周りの住人あつての生活となった。



● 商店

● 居酒屋

● 喫茶店

● 銭湯

街を使う暮らし

風呂無し住宅が生んだもの

この住宅にはお風呂がない。なので、夜になるとみんなで銭湯に入りに行くのが普通になった。銭湯をきっかけに僕たちは街を使うということをするようになった。喫茶店にコーヒーを飲みに行ったり、商店で野菜を買ったり、居酒屋にお酒を飲みに行ったりした。

街の縮図

街は大きくなる

私の欠片、街の断片

私たちはこの街に、一時的に集まっているのかもしれない

近づく終わり

街との別れ

そんな生活も、僕たちの大学卒業とともに、終了する。この1年、僕たちは街を使い、街に育てられてきた。しかし、いつかは街と別れを告げないといけない時は来る。

僕たちはどのようにして、街と別れていくかを考えた。

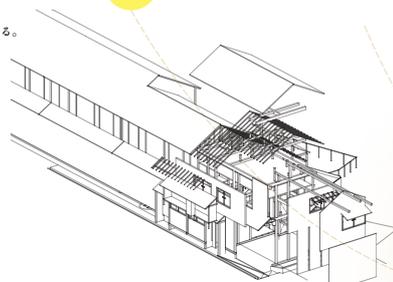
暗い未来

古くて住み心地が悪いこの建築に未来はない。重機で取り壊され、そっけないアパートが建つだろう。そんな未来は見たくない。

終わりは新たな始まり

老朽化により取り壊されるであろうこの住宅を僕たちの手で解体する。しかし、ただの解体ではなく、解体途中の一過性の空間を使い、僕たちが約1年かけて築き上げた街との関係を縮図として、表しながら解体する。

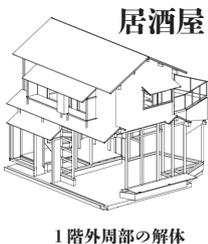
建築は小さくなるが、街は大きくなる。



2022年1月

建築は小さくなる

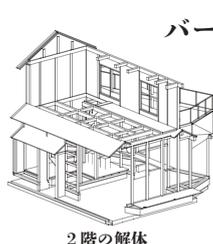
2022年3月



1階外周部の解体



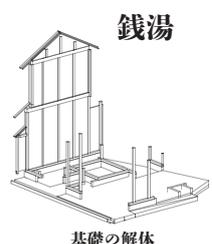
屋根の解体



2階の解体



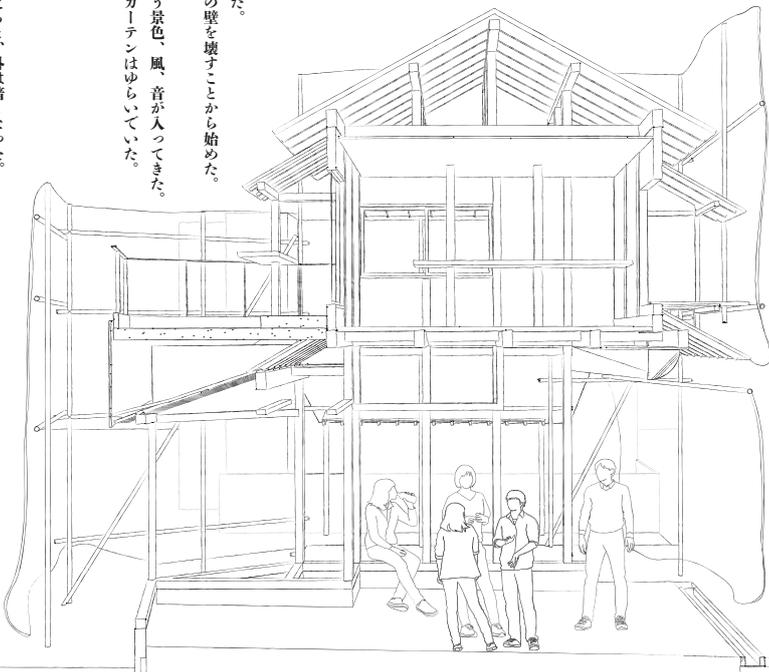
1階の解体



基礎の解体

2022年 1月9日 (日)

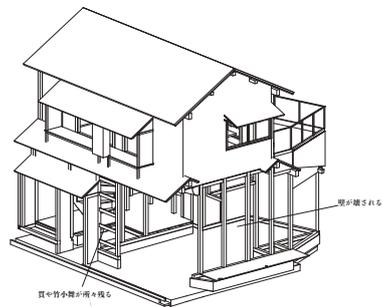
ガレージ
シャッター前



断面図 S: 1/25

0 910 1820 2730

解体アイソメ図



柱や骨組みが壊れる

壁が壊される

けっ
たい
な
酒
成
皿
り

「街のみんなが酒でも呑まや...」

「なんか居酒屋みたいやなあ」

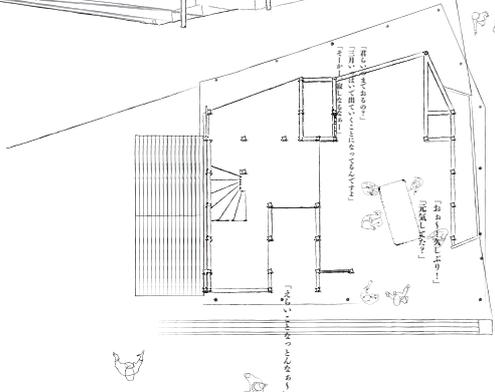
ある日、解体作業を終えると、外は暗くなった。
すると、内部の光が、カーテンに反射し、ガレージが提灯のように灯されていた。

いよいよ解体が始まった。
まず僕たちは1階外部の壁を壊すことから始めた。
すると、今までとは違う景色、風、音が入ってきました。
解体足場にかけてられたカーテンはゆるらいていた。



断面図 S: 1/25

0 910 1820 2730



配置図兼1階平面図 S: 1/50

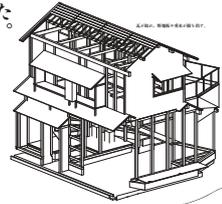
0 910 1820 2730

名前のない喫茶店

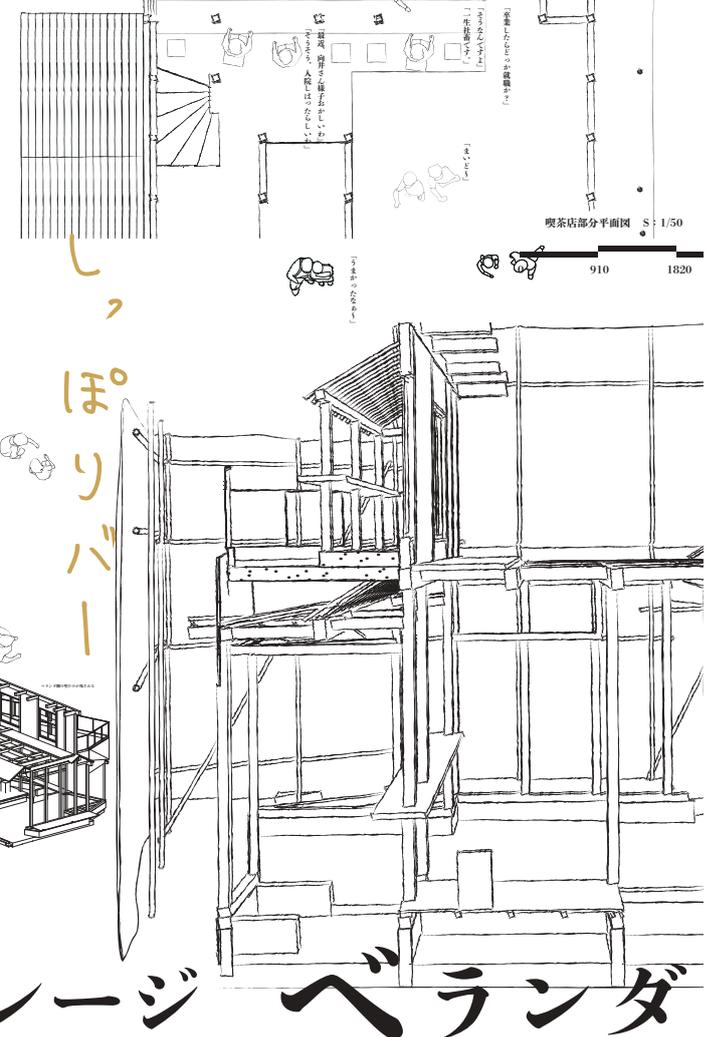
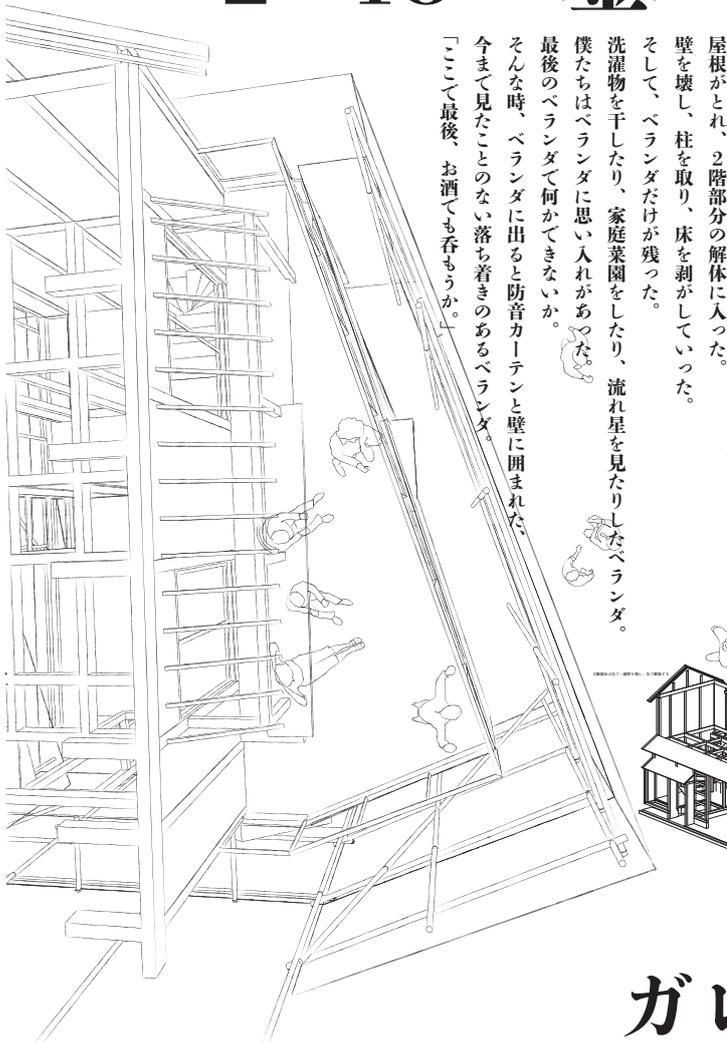
2022年 1月 15日 (土) ガレージ 旧 縁側



内部の壁はなくなり、次は屋根の解体を始めた。瓦を剥がすと、粘土や野地板が顔を出した。すると、内部に光が差し込んできた。今まで、光が当たらなかった場所に強烈な光が差し込んだ。内部が外部にさらされすごく気持ち良かった。暗くて、でも明るくて、なんかいつも行っていた喫茶店みたいやなあ」「ほんまやなあ。」「1日だけこっそり喫茶店やってみよか」「ええなあ」「土曜にやったら、休んでなんやかんや人來そうやなあ」



2022年 2月 18日 (金)



屋根がとれ、2階部分の解体に入った。壁を壊し、柱を取り、床を剥がしていった。そして、ベランダだけが残った。洗濯物を干したり、家庭菜園をしたり、流れ星を見たりしたベランダ。僕たちはベランダに思い入れがあった。最後のベランダで何かできないか。そんな時、ベランダに出ると防音カーテンと壁に開かれた、今まで見たことのない落ち着きのあるベランダ。」「こゝで最後、お酒でも呑もうか。」

しっぽりバー

ガレージ ベランダ

2022年3月10日(木)

ガレージ 土間

やっと住宅が解体されてきた。

解体足場の中に軸組だけが残されている。

いよいよこの家の解体も終盤に差し掛かった。

住む場所じゃなくなったこの場所では、

生活用品の処分に困った。

「ネットって売るしかないかあ〜」

「そやなあ」

そんな時、街中に、「ご自由にどうぞ」と

書かれた家具が置いてあったのを思い出す。

「そうや、俺らが使ってたものも

街のみんなに使ってもらおう。」

「バザーしまか」

よ
っ
て
よ
っ
て
バ
ザ
ー

2022年3月27日(日)

日
取
後
の
銭
湯

告
白

柱数本と基礎だけが残った。

基礎は分裂し、ガレージと街との境界が滲んでいく。

いまだに、解体足場はガレージの輪郭を残している。

「最後、ここでお風呂くらい入りたいなあ」

「じゃ最後に銭湯でもやってみよや」

そんな言葉から銭湯をすることになった。

浴槽は残された基礎の一部。

燃料は解体で出た廃材。

ガレージの最後は、銭湯として消えていく。

みんなて語り合い、思い出話に浸る。

そして、この銭湯、この時間こそが、僕の卒業設計の発表会でもある。

ガレージ

跡地

Society5.0における人の距離 ～夢洲：スマートシティ実験場を跡地にしない～



居住区全体パース

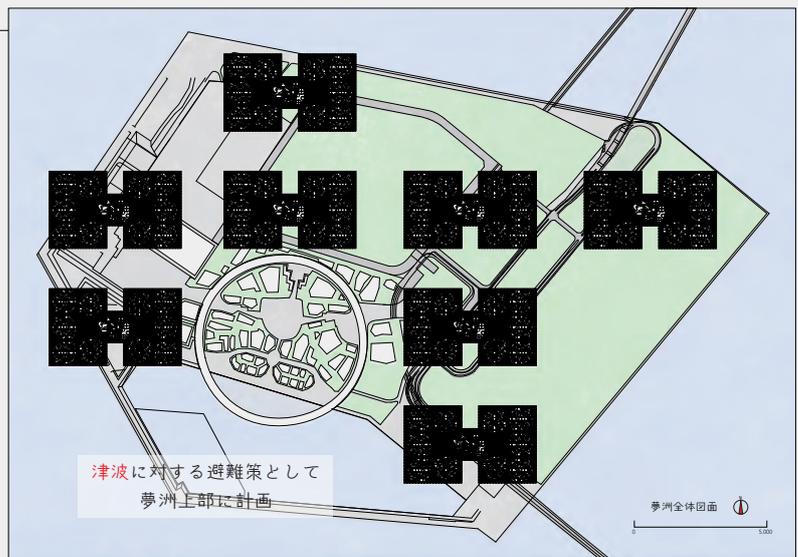
00, Purpose

『万博会場：夢洲を跡地にしない』



未来に
適応させて
継承する

居住区を挿入し
新たな未来都市を構築する



01, Background

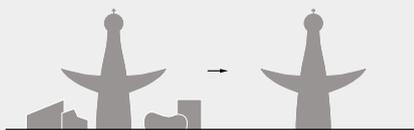
『過去となった未来技術の祭典』

○スマートシティ実験場

2025年に大阪・関西万博が夢洲で開催されることが決まっており、様々なパビリオンの建設が予定されている。

○万博開催後の跡地問題

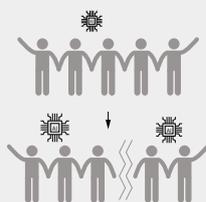
過去にも大阪では日本万博博覧会が開催されたが、この時に建設されたパビリオンはほとんど現存していない。跡地と呼ばれている。



『個の加速・集積』

○地域コミュニティの退化

Society5.0における生活はますます『個』の加速・集積が進み、地域コミュニティ単位での交流がなくなる恐れがある。

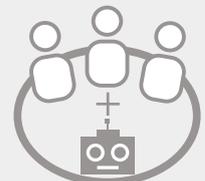


02, Problem presentation

『地域コミュニティとの共存』

情報技術の発展により生活環境は快適になったが、人の生活の基盤はデータ上ではなく現実世界である。データ上でのやり取りは結局補助的な側面しか持てないのだ。つまり住区計画において重要視されるべきは『対面でのツナガリ』ではないだろうか。

そこで未来の生活にツナガリの役割を持つ『地域コミュニティ』を、技術の発展物と共存させて生活空間に組み込んでいくことが、未来の住区計画におけるポイントになるのではないかと考える。



04, Plan concept

『不変的な人間距離』

情報技術・科学技術の発展し、物流や通信などのモノの距離が縮まろうとも**人と人の距離は変わらない**。変わるべきでない。

そこで技術の発展物の恩恵を受けつつ、身近に温かみを感じ取れる距離感でしか得られないものを重要視した住区計画を提案する。

対面でしか得られないもの

- ・モノを味わう
- ・モノを香る
- ・モノを創造する
- ・体を動かす、清める
- ・偶発的に起こる事象
- ・その場でしか感じ取れない雰囲気



- パブリックキッチン
- 菜園・パブリックキッチン
- DIYスペース
- ジム・グラウンド・温浴施設
- 交流スペース・チューブ（通路）
- 学びの場・温浴施設

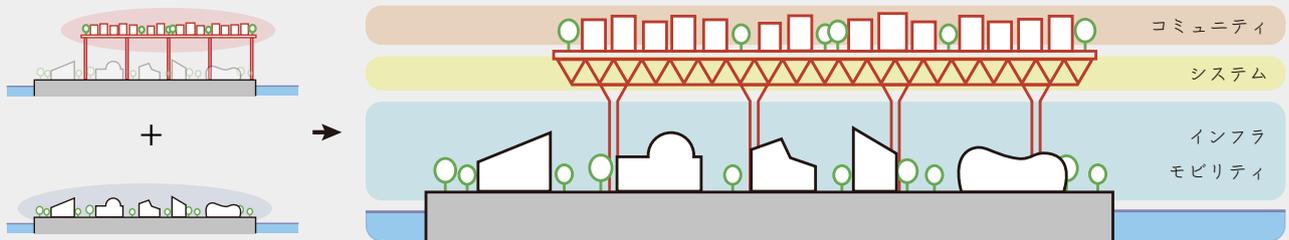
Society5.0を具現化する

05, Plan program

『居住区の付与』

万博開会後のパビリオン周辺に未来的かつダウンタウン的な**居住区を付与**する。インフラやシステム面では万博の副産物を再利用し、コミュニティ面は**ヒューマンスケール**で新たに計画する。

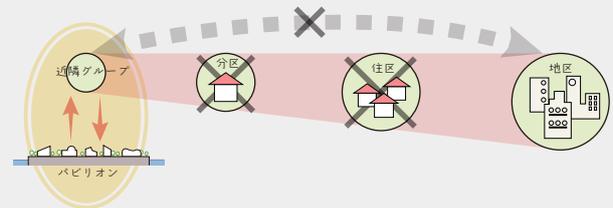
この際、居住区を計画するにあたって、海辺における災害（津波等）の**避難先確保**のため**夢洲上部**に計画する。



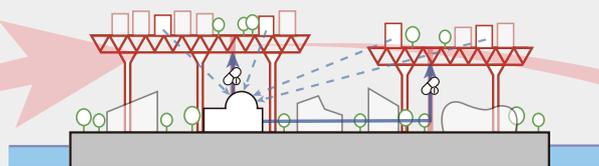
『新たな近隣グループの構築』

分区や住区などの存在意義が薄まる現在、パビリオンと居住区間の**連携**を念頭に入れた新たな近隣グループを構築する。

連携による上下間の**ツナガリ**により未来技術と地域コミュニティの共存が成立した住区モデルを生み出している。

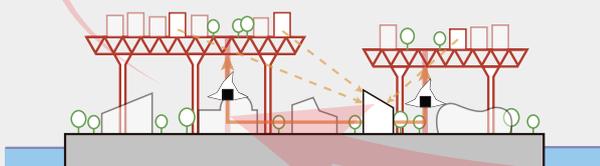


case 1, 〈病院〉



〈居住区とパビリオンのツナガリ〉

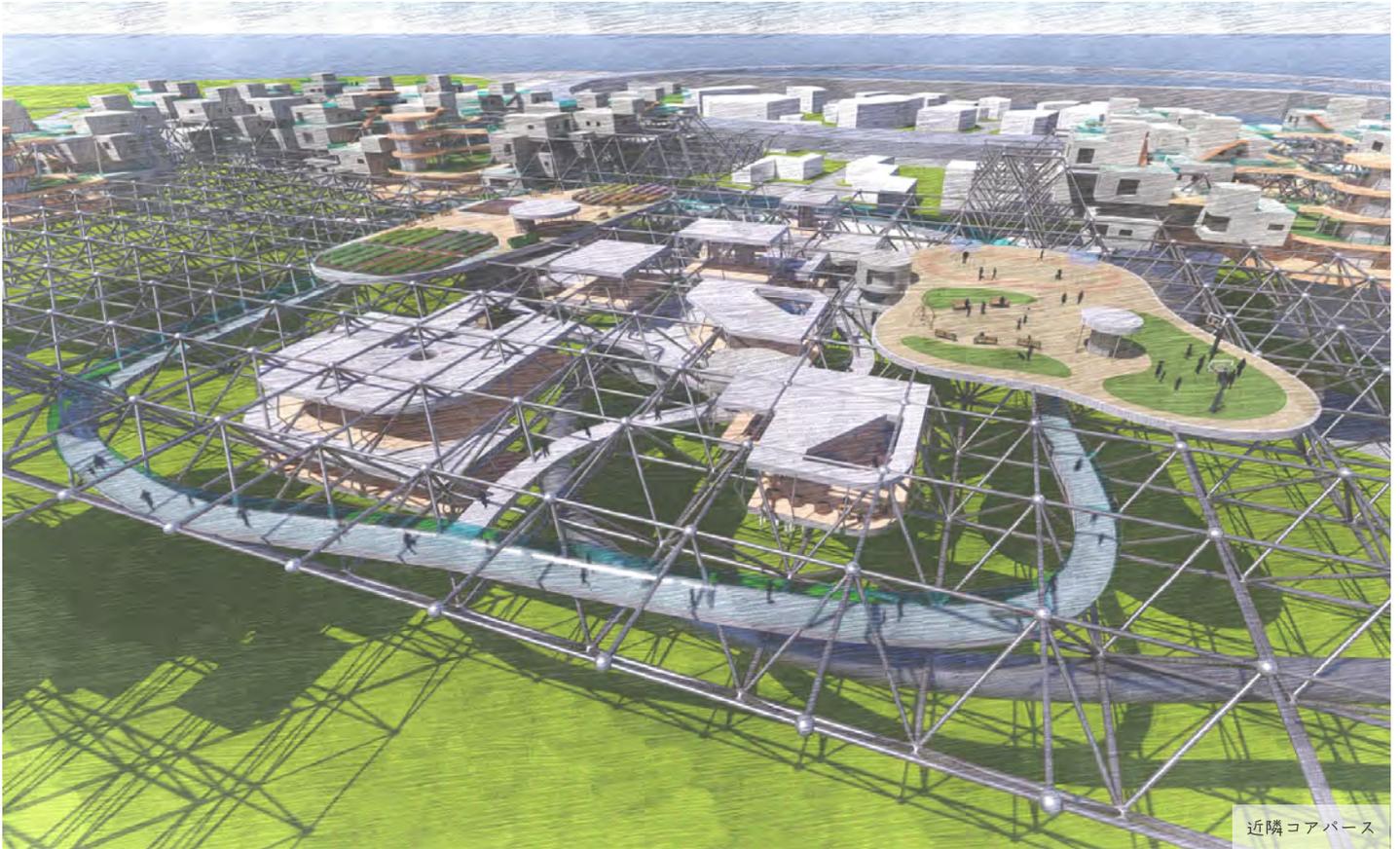
case 2, 〈飲食店〉



case 3, 〈学校〉



トラスはシステムの象徴



近隣コアバース

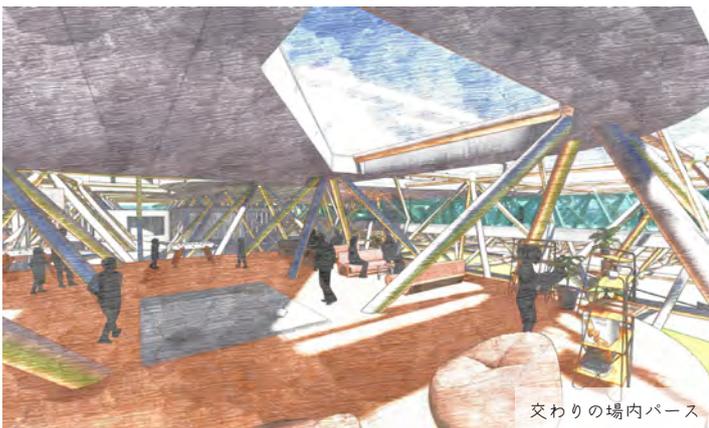
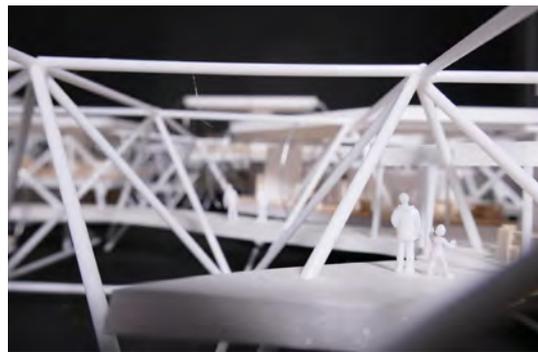
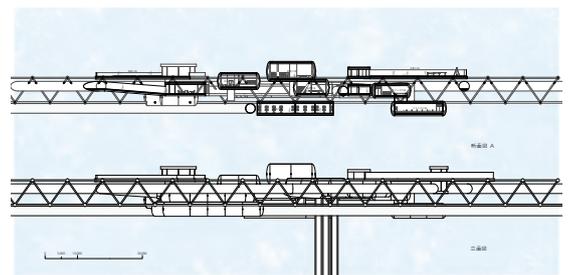
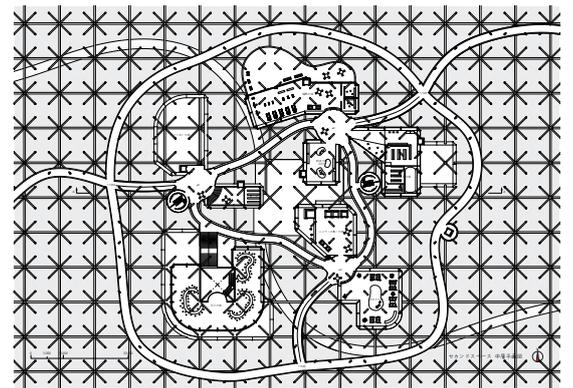
06-1, Design concept

○木とトラス、鳥と人。

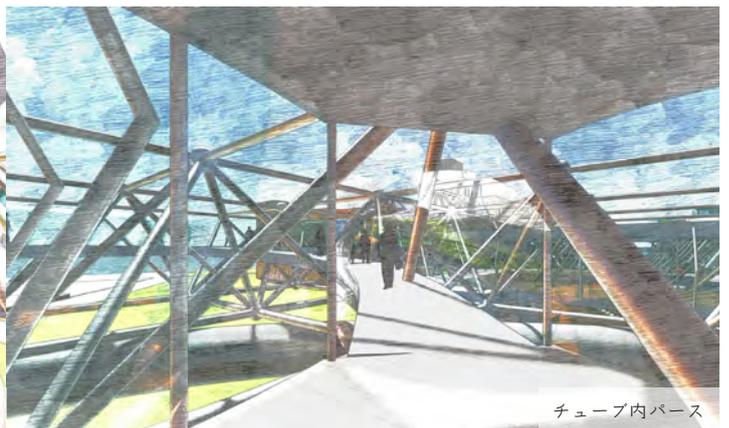
地球上のシステムを担っている植物：木をシステムの象徴であるトラスに。そして樹木に寄生し空を生活拠点とする生物：鳥を地球に寄生し生活する人間にそれぞれ変換する。その両関係性を建築に変換させることにより、本計画に適合するトラスに寄生する鳥の巣のような造形となる。



トラスに構造的に寄生することによって、内部では通常の建築物では味わえない非日常的な生活拠点空間が生まれる。



交わりの場内バース



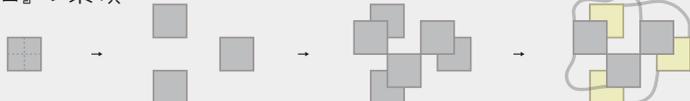
チューブ内バース



集合住居部パース

06-2. Design concept

○『個』の集積



トラスのグリッドを基準として 分割した住戸をグリッドを基準として 1住戸を計画し、それを4分割して軟文的に配置する。

4分割したグリッド単位でずらした住戸を積層させる。

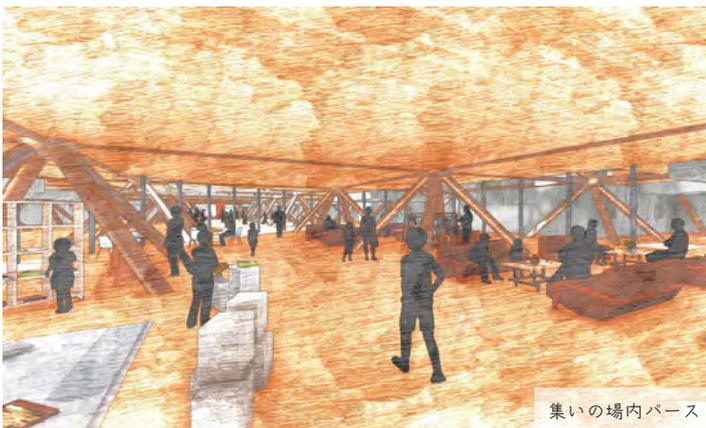
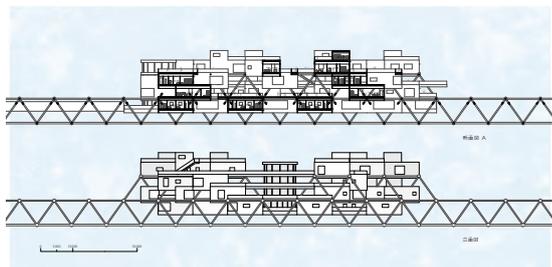
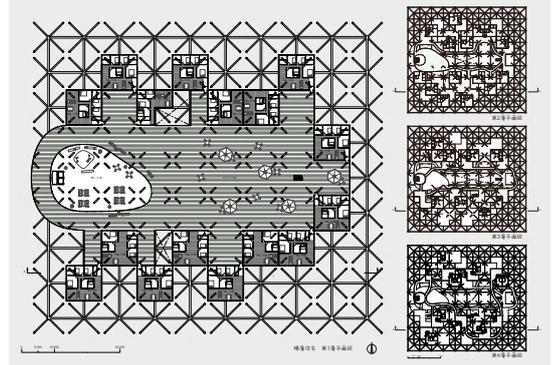
現れた空間に小さなコモンが生まれ、それらを有機的な通路でつなぐことで『個』を集積させる。

○次世代の物流動線をふまえた住戸計画

技術とコミュニティの共存の図れる住居計画のため、次世代の物流動線に適応する提案として以下の3点をあげる。



1. 自走式モビリティ走行路確保のため廊下幅や玄関前の空間の拡張
2. ドローンからの集荷のための発着場や吹抜区画の整備
3. ダクトの通り確保兼構造体軽量化のためヴォイドスラブの活用



集いの場内パース



住居内通路部パース

vu jade

～当たり前ではなく感謝を 日常に気づきを～

シンプルな外観でありながら、この正四角錐の形は頼るものにその存在感を与える。自然界には円形状が安定するものが多く、角のあるものは時とともに、次第と丸くなる。

分子結合や結晶化のように要素が格子状に結びついて安定化する場合を除けば、正方形のもの、間違いない人間の意志に基づいて生み出されたものと言える。正方形を見た時に、私たちが最初に感じ取っていることは「そこに人間の理性が関与している」ということだろう。また、人間は「垂直・平行」「東西南北」など2軸が直行する世界に住んでいるのだ。

そして、人間の「使いやすいさ」を追求した空間は、室温・換気量・照度などが完璧に制御され、人間以外を寄せ付けないものになっている。私自身、そのような空間で生活しているわけであるため、居心地が良いのは重々承知である。

ただ、そのような空間に長くいると思うことがある。肌で感じる外気温・風、外の匂い、音、光などの五感に断えかけてくるものを遮断することによる、五感を刺激しない時間の増加である。

現在のインテリアは「明るさ＝豊かさ」ということを強く感じられるものであるもの、日本では、和紙を抜けて出てくる柔らかな明かり、提灯、灯籠流しといった暗闇を残しつつ、部屋に映し出される陰影に芸術的感性を見出した。建築内のプログラムで働いたのではなく、建築そのもので働いたのが、今設計の目的である。

ここでの「気づく」という行為の癖付けによって、日々の感謝を増やす。そのための第一歩となる建築を目指している。

～ありがとうには～

- ・人に何かをしてもらって「ありがとう」
- ・自分に対する「ありがとう」
- ・何かをさせていただいて「ありがとう」
- ・動植物、自然、宇宙、への「ありがとう」

の4つの種類があると考え、そしてそれらのどれが欠けても、どれが偏ってもいいけません。

例えば、「最近どのようなことに感謝の気持ちを持ちましたか」という質問をしたいと思います。おそらく、助けてもらった・モノももらったなどの「人に何かをしてもらってありがとう」が多くなるとは思いませんが、それでは何かをしてもらわないと

もちろん人への感謝に触れる機会がたくさんあり、感じやすいので、多くなるのは分かりますが、それでは何かをしてもらわないと感謝することができなくなってしまいます。極端な話ではありますが、そうならないとも限りません。他の種類のありがとうにも目を向けてあげてください。

～「当たり前」と「ありがとう」～

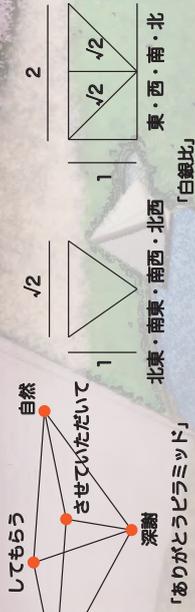
「当たり前」の対義語をご存知ですか。

非日常？あり得ない？不自然？ たまたま？

いいえ、それらは間違っていないかもしれませんが、適切でもありません。

「ありがとう」

漢字で有難うと書き、有ることが難しいことから「滅多にない」ことを意味する言葉です。当たり前ではない困難に直面し、それを助けてくれる、何かが起こったときに人が「有難う」と言うのは、二つの言葉にこのような関係性があるからだと感じました。



～program～

ここは「ふと」絵が描きたくなる場所です。入館と同時にスケッチブックと鉛筆と消しゴムを渡します。

絵を描く・景色を眺める・おしゃべりをするなど基本的には自由です。

「絵を描く」ためには自然と描こうとする場所を「観察」します。この観察により「気づき・発見」と繋がります。

また、ほかの人の絵を見ることで、自分とは違う視点に気づくこともあります。

影は、時間とともに姿を変える。いつ来ても同じようでもどこか違っている。その違いに「絵を描く」ことで気づいてみて下さい。

描いた絵は持って帰っていただいても構いません。

～建築デザイン～

当たり前前の対義語である「ありがとう」を形にした。

傾りのない4つのありがとうは4つの辺・角が等しい性質を持つ正方形で表現している。

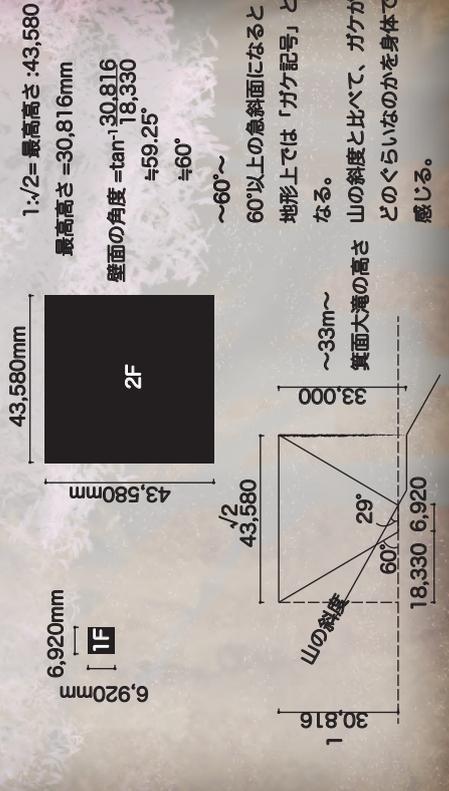
また、立体にするためにもう一つの意味を加えた。4つのありがとうを等しく感じることにより下へ下がるという、いわゆる「感謝の気持ち」が深くなる」という形を逆ピラミッド型で表現している。私はこれを「ありがとうピラミッド」と呼ぶこととする。

また、屋根の水勾配によって、雨水で裏面の滝を表現するとともに、側面の三角形が滝による池に写ること、裏面の市章を表現する。

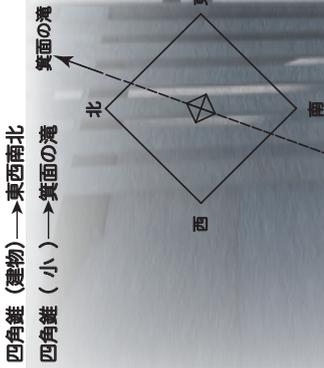
この建築には白銀比を取り入れている。山に配置する以上、近くでも遠くでも美しく見せることが必須条件であると考えている。

～寸法から裏面を感じる～

裏面の面積≒47.84km² 大阪府の面積≒1,899km²
 ≒6.92%km² ≒43.58%km²
 ≒6920%㎡ ≒43,580%㎡



「四角錐が示すもの」



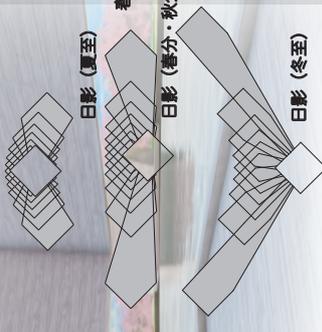
真面市の太陽高度
 計画地の緯度 = 34° 84' N
 ≈ 34.8°
 計画地の経度 = 135° 47' E
 ≈ 135.5°

夏至の南中時刻における太陽高度
 = 90° - 34.8° + 23.4°
 = 78.6°

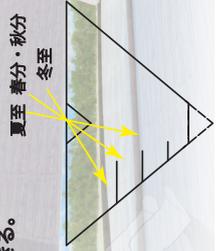
1日を通して北側に大きな影を作ることはない。
 また、東西南北の4つに分けたときに、太陽がかなり北寄りから昇るため、朝9時までは太陽は北側にあり、南側に影ができる。そして、15時ころに太陽はほぼ真西にあり、その後は北にまわる。体感として、ほぼ真上からの日射となる。
 ・春分・秋分の南中時刻における太陽高度
 = 90° - 34.8°
 = 55.2°

真東から昇り、真西に沈む。
 ・冬至の南中時刻における太陽高度
 = 90° - 34.8° - 23.4°
 = 31.8°

1日を通して北側に大きな影を作る。特に8時や16時の影は長いので、面白い影となる。低い角度からの日射となる。



季節により南中時刻の太陽高度が変化することを活かし、スラブのレベルを大きく3つに分けていく。照らされているスラブにより、季節を感じることができる。



～立面計画～

「シンプルなお外観だからこそできること～」

・日時計

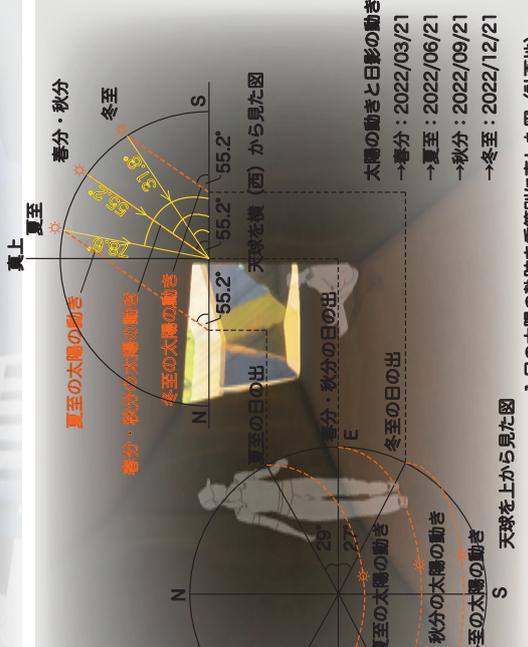
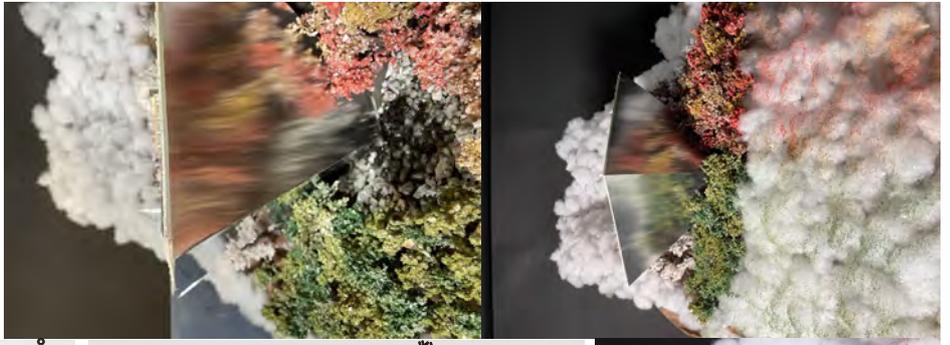
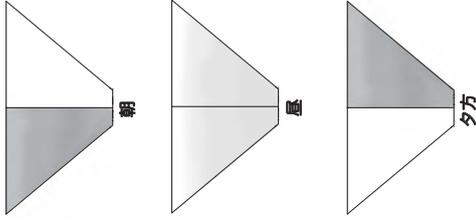
それぞれの角は東西南北を向くように計画しているため、上のダイアグラムのよう朝・昼・夕方での太陽の位置によって影の入り方が変わってくる。正確な時間は分らないが、時間の移り変わりを視覚から感じられる。

・フロストミラー

外壁の側面にはフロスト加工する。山の中に建てるには、自然に対しての「異物」にならないようにしなければならない。

季節・天候による周辺の色を壁面に移すことで、周辺環境との調和を図っている。

1枚目のパースのように春は桜色、夏は緑色、秋は赤色、冬は白色といった様々な表情を見せ、季節や天候を感じさせることができる。



太陽の動きと日影の動き
 →夏至：2022/03/21
 →春分：2022/06/21
 →秋分：2022/09/21
 →冬至：2022/12/21

1日の太陽の軌跡を季節別に表した図 (計画地)



～断面計画～

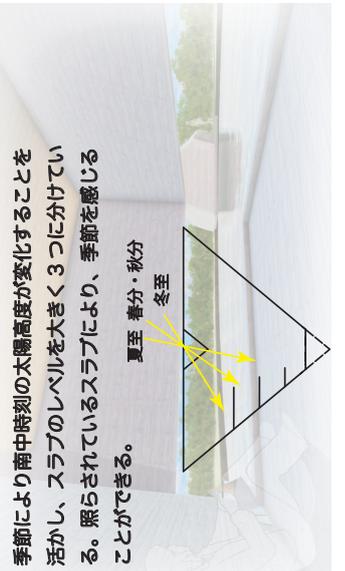
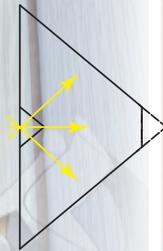
様々な高さのスラブを配置しているため、自分が描きたい面角で描けるようにしている。
 スラブや壁が入り組んでいるため、影の置き方は不規則である。

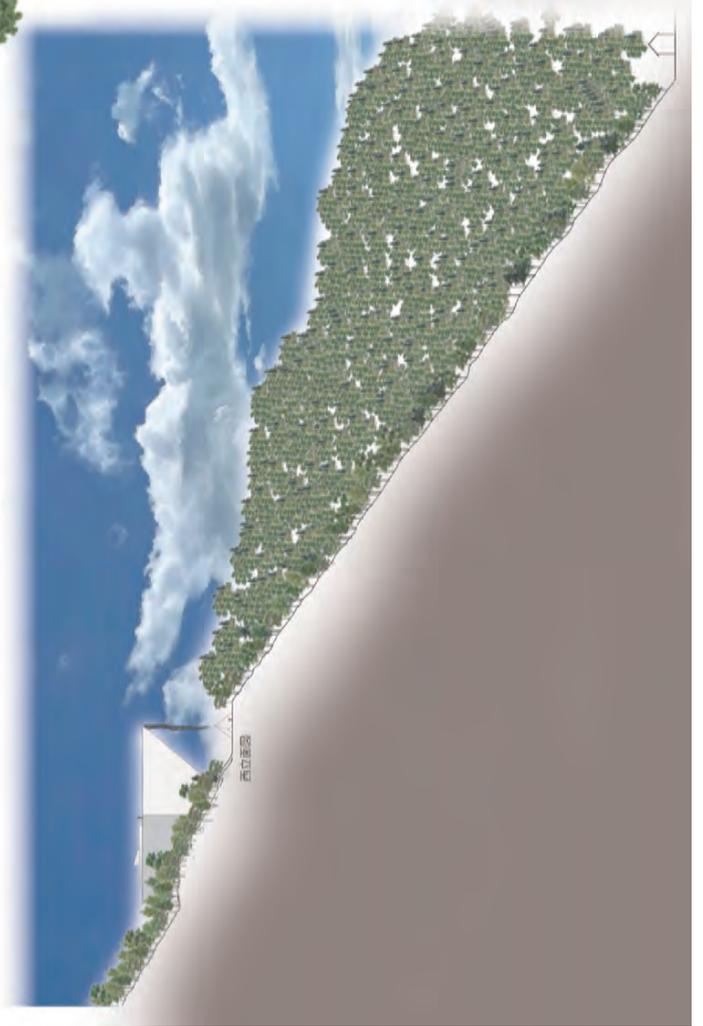
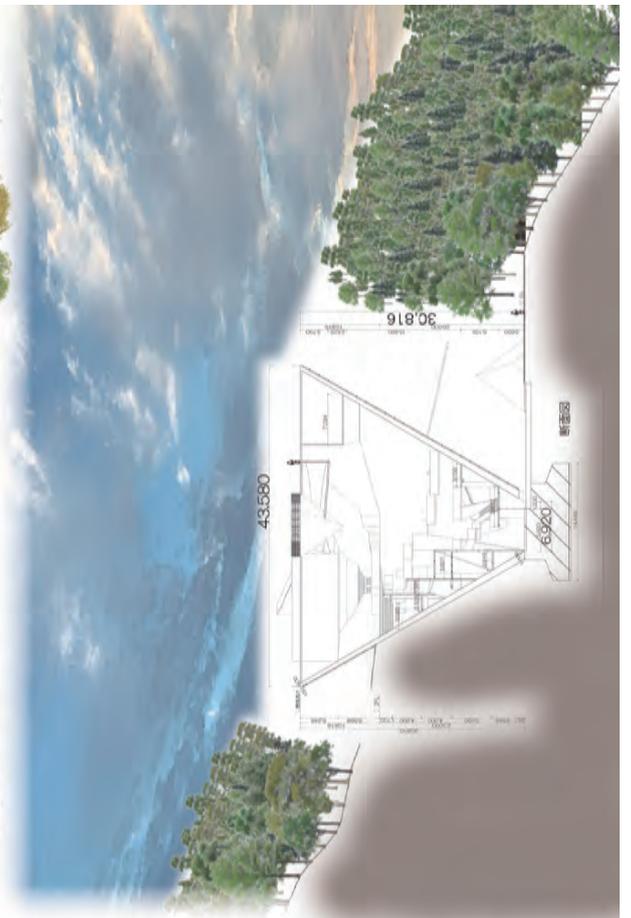
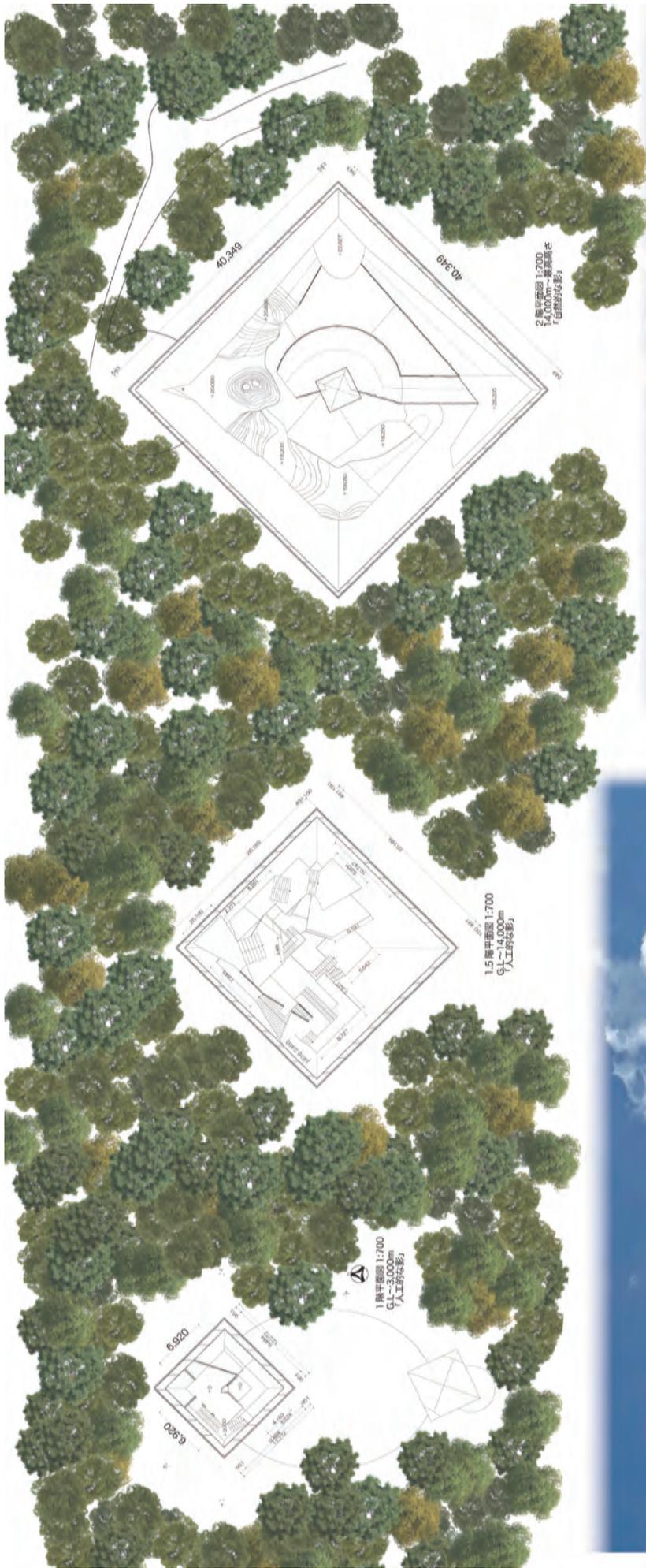
室内に開口部がないのは、屋上に出たときに室内とのギャップで、より開放感を与えるためである。

構造は四角錐の周囲に鉄筋を環り巡らせている。吊り下りすることも念頭に入れている。

「埋まった四角錐」

四角錐を山に刺すと、土に埋まった四角錐(小)ができる。この場においては「深い感謝」を表し、大変意味のある部分である。この四角錐(小)は最高高さまで移動し、ガラスで作ることで建物内を照らす。





舟運

から広がる水都大阪の可能性

淡路島へ



航路 — (例)

- 旧新
- ① 大阪城港→淀屋橋港→八軒家浜→大阪城港
 - ② 湊町船着場→若松浜船着場→ユニバーサルシティ埠頭
 - ③ 大阪城港→淀屋橋港→ターミナル→タグポート大正→万博会場→海遊館西はとば→ターミナル→八軒家浜
 - ④ 湊町船着場→若松浜船着場→ターミナル→ユニバーサルシティ埠頭→万博会場→渡し舟→タグポート大正→ターミナル

02 背景 — 水都大阪としての在り方

現在大阪は行政を中心に大阪万博に向けて水都として魅力あふれる街づくりを目指している。

そのためには舟運はかせない。さらに万博会場が海の上にあるもあり、水都大阪の魅力を発信する最大のチャンスである。しかし、船には川船と海船があるので、中之島などの中心地から直接船で行くことができなかった。大阪万博でイメージをつけることは勿論、その後万博が終わった後の水都大阪を考える。

01 概要 — 舟運乗り換えターミナル

大阪の特徴である都市の中にひとつなぎで川が繋がっているのに対し、川から海へ舟だけで移動する際に必要な、川から海船に乗り換える、舟運乗り換えターミナルを提案する。

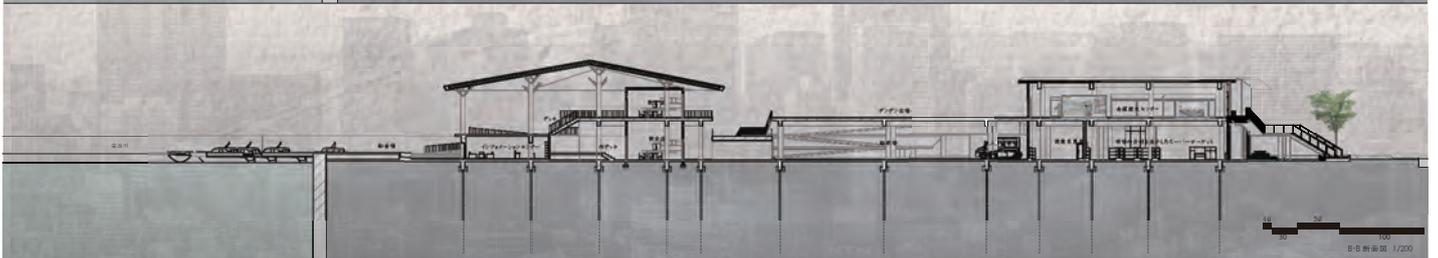
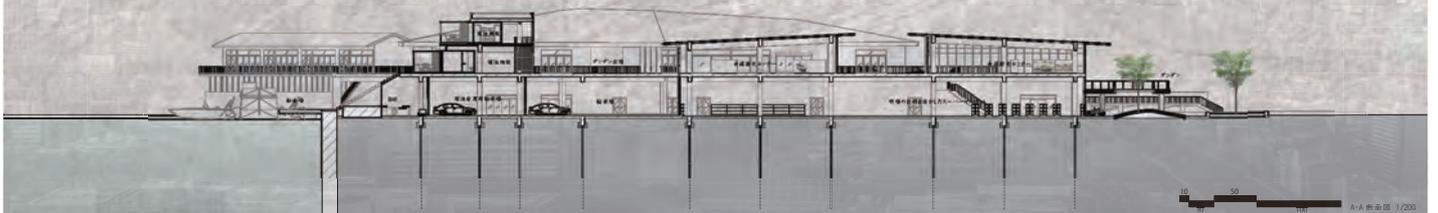
また、ターミナルの設計だけでなく、既にあるほとんど利用されていない船着場に最小限のデザインを加え現代の水都大阪の可能性を広げる。

03 対象敷地

大阪府大阪市西区川口2丁目9

大阪の中でも比較的舟運が盛んな中之島の南、安治川沿いにあり、まっすぐ南へ下ると2025大阪万博会場につく。対面には全国で2番目の規模を誇る大阪中央卸売市場があり、最も多く交わる川の交差点。

この地を大阪の舟運の中心となるよう計画する。



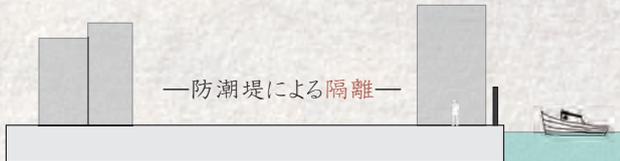
04 問題



—インフラによる隔離—



人は常に利便性を求めて成長してきた。物流も同じである。かつて技術がなかった人間は水の浮力を利用することで、より多くのものや人を運んできた。そしてインフラ設備が整った今はもう、長距離の大運搬でしかほとんど利用されることはなく、舟が日常で利用されることはほとんどない。勿論、地上インフラの利便性が高いのはあるが、問題は水上インフラの利便性にあるのではないだろうか。



防潮堤とは陸上にあり、高潮・高波・津波などの浸入を防ぐための堤防である。当時、人々の安全を求め、第1に建設されたこの壁だが、今となっては街と川を分断する大きな障壁となっている。水辺が近くにあるのに街から見えない、見えないから意識されない、意識しないから利用しづらい。如何に防潮堤を感じさせずに居場所を作り、利用してもらうか。

05 舟運

—薄れた舟運—

舟運とは舟で人や荷物を運ぶことである。かつて大阪は都市の中に川が巡っており、舟運によって物流、交通が保たれていた。しかし、橋を作る技術が上がり、車がで、陸上で多くのものを運搬できるようになったことで舟運は大規模なもの以外は日常から消えていった。しかし、私は現代のインフラが整った日本でも舟運は1つの交通手段として見直されるべきだと考えている。



—舟運の回遊性—

大阪の川は、世界でも珍しく都市の中で栄えたまま残り、今も中之島～心斎橋の口の字型の回遊性が見直されている。しかし、実はこの他にも対象敷地を中心とし、タグボート大正～海遊館や、淀川とも全て繋がっており、舟さえあれば好きに動き回れることが分かると思う。これらは、舟の乗り換えがあつてこそ成立する。大阪のこの回遊性こそがアイデンティティであり、この環境を整えることで水都大阪はより強固なものへと発展する。

06 乗り換えターミナルの必要性

船には大きく分けて2種類ある

右図にもあるように「川舟」と「海舟」だ。

川舟と海舟との一番大きな違いは、実は舟底の形にある。

川には流れがあるが、波はほとんどない。

海には波があるが、川のような流れはない。

海舟の船首部分の形は波を押し分けて進むことができるように鋭角となり、そのまま水中にまで続いている。舟底を「V」の形にすると、喫水線が深くなり、舟は安定する。しかし、水深の浅い場所では舟底がつかえてしまい、かえって使いづらくなってしう。川はいたるところに浅瀬があるため、舟底をなるべく平らにした方がいいのだ。

川舟



海舟



07 プログラム

01. 水都大阪の中心を創る

大阪を舟運のもつ可能性で東京に、世界に、負けない水都にする。ポテンシャルならある。既に川は都市の中に張り巡らされており、海は近く、舟運自体に歴史がある。さらに、最低限の船着場なら十分な数ある。あとは、舟運の拠点を作ればいい。それだけで大阪は大きな一歩を踏み出すこととなる。全ての舟はここに集い、ここから拡がる

02. 船着場に居場所を創る

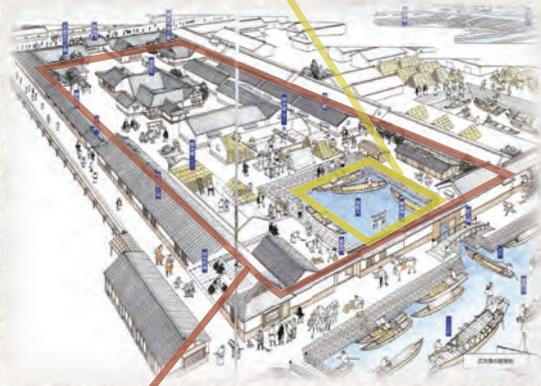
現在、ほとんどの船着場は岸に寄り添ってあるだけの味気ないものばかりで、とても利用を推奨できる状況ではない。また、ある調査の結果では現在の船着場では落ち着かず、利便性も悪いと意見が集まっている。「中心」を創ったのならば利用してもらうための各船着場の居場所作りが大事だ。ターミナルだけでなく、船着場をデザインし、舟運利用以外の集客を促すことで舟を利用する繋がりを生む。



敷地背景

01. 蔵屋敷

江戸時代において、大名・幕府・旗本、社寺、諸藩家臣が貢租米その他国産物を売却するため設置した屋敷で、倉庫を付設する。特に大阪に多くあり、舟運の特性を良く活かした構成となっている。蔵屋敷の主たる役割は、(1) 蔵物(くらもの)を売却すること、(2) 領内非自給物資を調達すること、(3) 借銀をすることであった。つまり、ここが物流の心臓であったと言える。ここに物や人が集い、物流に適した舟運が利用されていたのである。



02. 入堀

江戸時代、市中に作られた人工の堀。河川から邸内に水を引き入れるための堀。大坂の蔵屋敷などにあった。今回は、跡地を活かして川を引き込み、船着場・水上スポーツ体験場となる。



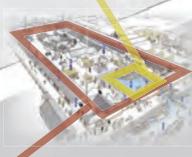
大阪中央卸売市場

大阪市中央卸売市場は、大阪市内にある大阪市の中央卸売市場。本場、東部市場、南港市場の3市場が開設されている。
 この本場は日本で2番目に大きく、江戸時代からの全国の食材があつまる、天下の台所の名残を感じられる場所でもある。

敷地背景

01. 蔵屋敷

江戸時代において、大名、幕府、旗本、社寺、諸藩家臣が貢租米その他国産物を売却するため設置した屋敷で、倉庫を付設する。特に大阪に多くあり、舟運の特性を良く活かした構成となっている。蔵屋敷の主たる役割は、(1)蔵物(くらもの)を売却すること、(2)領内非自給物資を調達すること、(3)借銀をすることであった。
 つまり、ここが物流の心臓であったと言える。
 ここに物や人が集い、物流に適した舟運が利用されていたのである。



02. 入堀

江戸時代、市中に作られた人工の堀。河川から邸内に水を引き入れるための堀。大坂の蔵屋敷などがあった。今回は、跡地を活かして川を引き込み、船着場・水上スポーツ体験場となる。

建物概要

- ・ 舟運乗り換えターミナル
- ・ 舟運歴史センター
- ・ 宿泊施設
- ・ 市場を活かした飲食店
- ・ 市場直売り
- ・ BAR
- ・ 水辺の広場
- ・ ダンダン広場
- ・ インフォメーションセンター



動線から形を考える

ここは地上インフラとしては最短でも駅まで14分もかかり、遠いものでは21分かかる。その分、地上からは地域民や車水上からは中之島や万博会場、USJから、「日常×観光」と異なる目的で来ることが多い。またこれは、普通の地上のターミナル(駅)と違つともいえる。この全く異なる体験、目的によりお互いが干渉しあい、川からの観光動線と陸からの日常動線を交わせ、人々が干渉しあう仕組み作りもこの平面プランを計画した。
 本計画は、いずれからのアプローチであったとしても、干渉地点がダンダン広場になっており、全ての人が交わり、お互いの動線に緩く導かれる

屋根で受け入れる

屋根の形をみると6角形になっていることが分かると思う。それぞれが、周辺環境に対して面を向かっている。北から
 ○大阪中央卸売市場
 ○中之島、northピア(船着場)
 ○船着場(入堀跡)
 ○正面入り口(大通り)
 ○ダンダン・舟運歴史センター
 ○ダンダン広場・宿泊施設
 今計画はターミナルとして各方面から受け入れ、大阪全体へと拡げることが重要であると考え、大きな屋根ひとつで表現した。



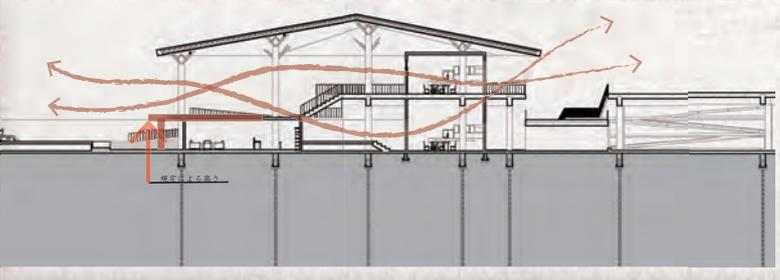
防災要素としての機能

船着場の所には水辺の広場があるが、もう一つ広場がある。
 先ほどの2FLを5,000mmにした理由とは別にもう一つ理由がある。
 2FLにあるダンダン広場だが、これがあることによりある程度の高さまでここで避難できる。ダンダン広場は川と陸を繋げるためだけではなく、訪れた人々を守ることもできる。
 実際、舟運が災害時に役立つことは阪神淡路大震災の時から言われており、逃げるにせよ、支給をまつにせよ利用価値が高く、災害時のキースポットになるだろう。



制限から形を考える

大阪の川は防潮堤が約3Mの高さで並んでいる。この敷地も例外ではなく、たかさ3Mまでは壁1枚は少な(化)も繋がっていないといけなかった。そこで、3Mの高さからさらにセットバックし、2FLの高さを3,000mmから5,000mmにした。そうすることで、ただ水が溢れないようにするだけの防潮堤よりさらに高い壁が出来る事となり、安全性が高まり、より自由な空間ができた。





今後の効果・フェーズ

01

First. 水辺意識を高める一斉
イベント・光・アート導入による都市
魅力の打ち出しの実施
実際に2012年頃から行われており、
集客効果、民間事業への投資を呼び
かける。
水辺＝綺麗 のブランディング



02

Second. 乗り換えターミナル・拠点創り—今
全計画の物理的ファーストアクション
舟運の中心であり、拠点
大阪市内で最も多くの川が合流する場所であり、
北に登れば直ぐに中之島がある
ここを中心に大阪の川辺が整い、賑わう
舟運だけでなく、その環境、風景も広がっていく



03

Third. 船着場の居場所創り
中心が出来れば、広げるためにも各船着
場の環境を整えなければならない
桟橋があるだけの状況や、老朽化、ベン
チ、屋根がないなどの問題を解決する
べく各船着場を再構築する。



04

Fourth. 拠点の拡大・賑わい創り
船着場と同時進行で、拠点となる今計
画敷地の周辺及び中之島地区との連携
を試みる。
中央卸売市場の南の川辺空間、それに
付随するnorthピア、計画敷地沿いの防
潮堤など、ここに来れば大阪の都会の水
辺空間、水都大阪を感じられるスポットと
して発展させていく。

